第6節　つがる市教育委員会による調査の方法と経過

1. 調査の方法

(1)調査区の設定

亀ヶ岡遺跡の発掘調査では、史跡内外とも基本的にトレンチ法による調査を実施した。地形の傾斜を考慮し、地上工作物等を避けて調査区を設定したため、トレンチの方向は平面直角座標系の軸とは一致していない。遺構の広がりが確認できた場合は、その平面形状が分かる範囲まで調査区を適宜拡張した。なお、調査区の名称は、その地点の字名と地番によった。

(2)表土の掘削および遺物包含層の調査

表土は人力による掘削を基本としたが、地下に影響を与えないと判断された地点においては、重機によって道路舗装や耕作土・撹乱層を掘削し、作業の効率化に努めた。包含層から出土した遺物は層位別に取り上げ、必要に応じて出土状況写真を撮影するとともにドットマップの作成を実施した。

(3)遺構調査

遺構番号については、その属性に関係なく、調査地点ごとに連番を付した。検出遺構については、調査目的が範囲内容確認であることから、掘削を最小限度にとどめた。また、検出段階で掘り込み面や年代、性格がある程度判明した遺構については極力掘削を避けた。遺構の精査は、半裁あるいは土層観察用ベルト等を設定して土層を観察しながら掘削し、土層の写真撮影や断面図作成を実施した。遺物は出土層位別に取り上げ、必要に応じて写真撮影やドットマップ・微細図作成を実施した。焼土・炭化物が出土した際には遺物と同様の処置を行った。

(4)図面作成および写真撮影

遺構平面図は 1/20 の縮尺で作成し、微細図は 1/10、ドットマップは 1/10 あるいは 1/20 の縮尺を基本として作成した。遺構や調査区の土層断面図は 1/10 あるいは 1/20 の縮尺で作成した。

写真撮影は、平成 20～22 年度に 35 ㎜一眼レフカメラ(キャノン EOSKISSⅢ)を用い、カラースライドフィルム(ISO100)とカラーネガフィルム(ISO400)で撮影した。あわせてデジタル一眼レフカメラ(キャノン EOS5D・EOSKISS-Desital)を併用した。平成 25 年度以降はデジタル一眼レフカメラのみ用いて撮影した。なお、報告書に掲載した遺物写真の撮影にはデジタル一眼レフカメラ(ニコン D810)を用いた。

2. 調査の経過

亀ヶ岡遺跡における過去の調査のうち、調査地点がおおよそ判明しているものについては、つがる市教育委員会調査地点とあわせてその位置を図 1-17・1-18 に示した。

史跡指定地内では、公有地化事業により新たに公有地となった土地を対象として、平成 25 年度に３地点で内容確認調査を実施した（亀山 49-1・49-2、沢根 83-32、沢根 83-35 地点）。同年には、史跡指定地西端部の住宅で生活用水を確保するための井戸を新設する必要が生じたため、これに伴う現状変更判断の調査も実施した（沢根 83-52 地点）。平成 29 年度には、過去に調査の及んでいなかった史跡北側の丘陵地において２地点で内容確認調査を実施した（亀山 36-1、沢根 83-9 地点）。

史跡指定地周辺では、水道管敷設工事や耕作深度等の各種開発行為への対応を目的として、平成 20 年度より史跡西側隣接地および亀山地区から西に連続する丘陵部において範囲内容確認調査を継続的に実施した。平成 20・21 年度に実施した発掘調査結果については、平成 21 年度に報告書を刊行している（つがる市教育委員会 2010）。また、平成 22 年度には史跡指定地などに介在する道路（市道亀ヶ岡館岡線）で計 15 か所の試掘調査を実施しており、平成 23 年度に報告書を刊行している（つがる市教育委員会 2012）。平成 26～29 年度には主に農地や宅地を対象として範囲内容確認調査を継続して実施しており、その調査結果は本報告が初出となる。なお、周知の埋蔵文化財包蔵地外についても、その南側隣接地を対象として、包蔵状態の確認を目的とした試掘調査を平成 26 年度に実施した。

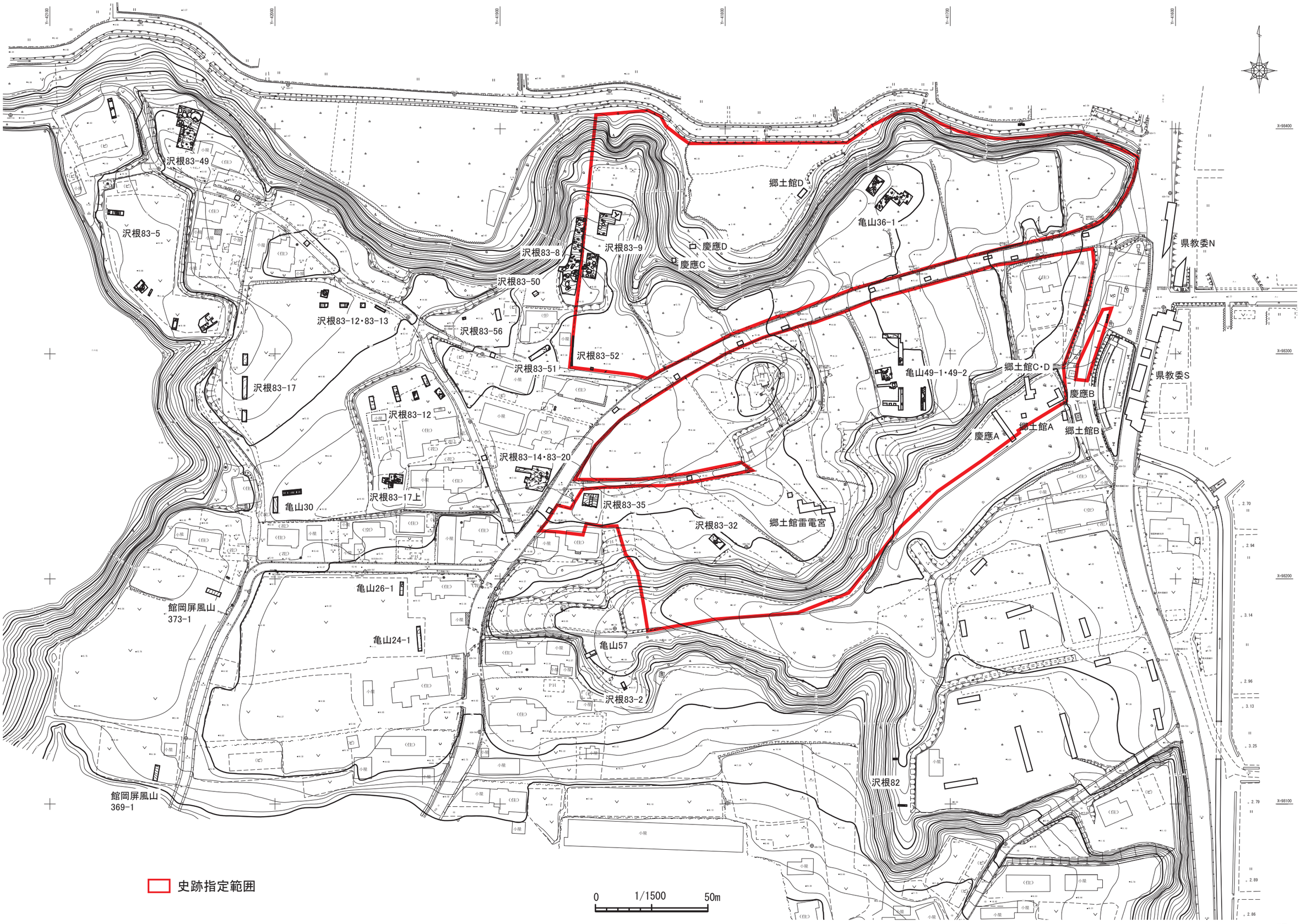


図1-17 亀ヶ岡遺跡 調査地点位置図

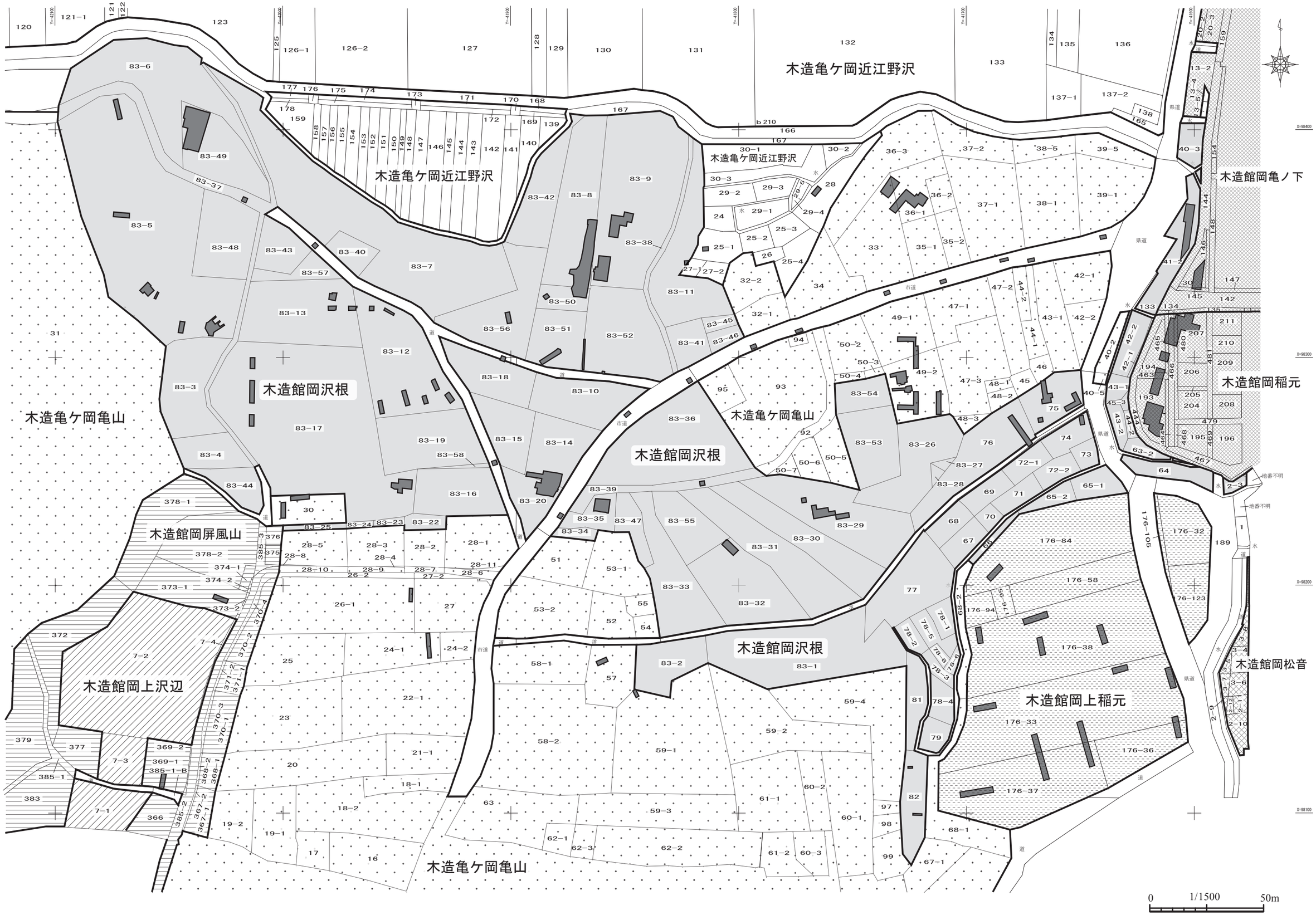


図 1-18 亀ヶ岡遺跡地籍図

第2章　調査研究の歴史および亀ヶ岡コレクションの概要

第1節　江戸時代の亀ヶ岡

亀ヶ岡遺跡は、少なくとも江戸時代より、土器の優品が出土する遺跡として弘前藩内や江戸市中ほかで知られていた。また、長崎出島を通じオランダなどにも土器などが流出していたことが記録されている。中谷治宇二郎により本格的に着手された江戸時代の亀ヶ岡遺跡研究史（中谷 1935）については、その後一層の評価が進みつつあり（村越 2007・つがる市教育委員会 2009・藤沼 2013）、本節においてはその概要をまとめる。

1.『永禄日記』舘野越本に記された亀ヶ岡遺跡

亀ヶ岡遺跡に関する最も古い記録は、元和９（1623）年に記され、18 世紀末に山崎立朴（やまざきりゅうぼく）が書写した『永禄日記』舘野越本である。この中で、近江野沢で行われていた亀ヶ岡城の築城が、幕府の一国一城令により中止されたこと、亀ヶ岡の地では昔からかめの形をした「奇代之瀬戸物」が多数掘り出されていたことが記される。あわせて、亀ヶ岡の地名もこのことに由来することが紹介されている。

『永禄日記』館野越本は、中谷治宇二郎の『日本先史学序史』（中谷 1935）においていち早く紹介され、ここに記載される前年の近江野沢城（亀ヶ岡城）築城中止の記事につづく、亀ヶ岡からの土器の出土記事から、亀ヶ岡城の築城をきっかけに遺跡が発見されたとする理解が定着する。しかし、『永禄日記』の原本は失われ、現在伝わる４つの写本のうち、亀ヶ岡の出土品についての記載があるのは舘野越本のみであることが成田彦栄により指摘された（成田 1955・1956a・b）。さらに三井聖史や村越潔により土器発見の記載についての再検討が進み、山崎立朴が菅江真澄の知見をもとに加筆した可能性も指摘されている（三井 1999a～1999ｄ・村越 2007）。

地元の研究者である佐藤公知によれば、亀ヶ岡城の外郭が遺跡の付近におよび、その堀を造る際に近江野沢低湿地で遺跡発見があったとされるが（三田史学会 1959）、亀ヶ岡城跡は遺跡の南方約１㎞に位置するうえ、亀ヶ岡遺跡に築城の痕跡が確認されないことから、築城と遺跡発見の関連は認めがたい。藤沼邦彦も指摘するように、亀ヶ岡城の造営工事により土器が出土したとする中谷の解釈は、原文の読み違いから生じた誤りと考えられる（藤沼 2013）。

2. 記録に残された亀ヶ岡遺跡出土品

『永禄日記』館野越本のほかにも亀ヶ岡遺跡出土品に関する記録は多い。山崎立朴と同時代の江戸定府の弘前藩士比良野貞彦（ひらのさだひこ）は武術に優れ、９代藩主津軽寧親（やすちか）の代に江戸藩邸の教授となる。同時に「外浜人」と号し、画をよくし、谷文晁などと交流のある人物であった（東奥日報社 1969）。寛政元（1788）年に８代藩主津軽信明（のぶあきら）に従い国元に赴き、翌寛政元（1789）年の江戸帰還までの間に弘前領内で見たものを記した『奥民図彙（おうみんずい）』を著した（森山 1977）。ここには「亀岳陶器」として亀ヶ岡遺跡から出土した壺形土器・注口土器などを記録している（図 2-1、関根 2006 ほか）。また、天明３（1783）年に比良野により書かれた箱書きが、亀ヶ岡での遺物発見に関する過去の記録を集成した佐藤傳蔵により紹介され、館岡村の山中から様々な形の陶器が出土すること、その陶器は嵐により転覆した異国船に舶載されていたと理解されているが疑わしいこと等が記録されている（佐藤 1900）。

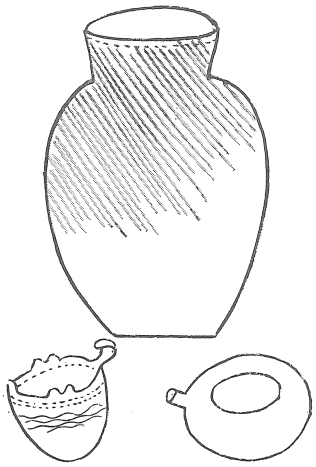


図 2-1　『奥民図彙』に記録された「亀岳陶器」（農山漁村文化協会 1977）

表２－１　亀ヶ岡遺跡の調査史

	年代	調査主体	調査原因	調査方法	地点	面積	時期	出土遺物・検出遺構・自然科学分析	文献
1	1884 明治17	蓑虫山人 （土岐源吾）	遺物収集	発掘調査	不明				青森県立郷土館 2008
2	1887 明治20	蓑虫山人 （土岐源吾）	遺物収集	発掘調査	近江野沢地区	不明	縄文晩期	土器、石剣、曲玉、土偶、管玉、サヌカイト製石器、曲玉・管玉の詰まった壺	蓑虫1887
3	1889 明治22	若林勝邦	学術	発掘調査	亀山地区（雷電宮付近）	不明	縄文晩期	土器、土偶、石器、獣骨／赤色顔料の化学分析	若林1889
4	1895 明治28	佐藤傳蔵	学術	発掘調査	亀山丘陵上 沢根地区	不明	縄文晩期後葉	土器、石器、貝殻、玉、クルミ／貝塚？、盗掘坑多数	佐藤1896a
5	1896 明治29	佐藤傳蔵	学術	発掘調査	第1次より北に210mの亀山丘陵下	約500㎡の区画中を発掘	縄文晩期中葉	土器、土偶、土版、動物型土製品、骨角器、骨、石器、貝殻、玉、クルミ	佐藤1896b・c
6	1917 大正6	柴田常恵	学術	踏査	雷電宮の南で写真撮影			写真裏面に「大正六、八、二七」のメモ	HP「國學院大學デジタルミュージアム」柴田常恵写真資料
7	1923 大正12	中谷治宇二郎	学術	発掘調査	雷電宮の西南部（木造館岡沢根76南辺の畦道、慶應Aトレンチの南方）	不明	縄文晩期	土器、石器、木製品？、クルミ	中谷1929b・1943
8	1934 昭和9	小岩井兼輝	学術	地質調査 発掘調査	沢根、近江野沢、雷電宮地区	不明	縄文晩期前葉～末葉。主体は晩期後葉	土器、石器、骨角器、獣骨、獣歯、鳥骨等／竪穴（住居）？、貝塚？	小岩井1934・藤沼2006b
9	1940 昭和15	吉田格	学術	発掘調査	雷電宮の南方	不明	縄文晩期	土偶頭部、土器、石鏃、玉	立正大学文学部考古学研究室1990
10	1949 昭和24	津軽考古学会	遺物収集？	発掘調査？	不明	不明	縄文晩期	土器ほか	
11	1950 昭和25	三田史学会 （清水潤三）	学術	発掘調査	沢根地区（Aトレンチ） （木造館岡沢根76）	30㎡	縄文晩期前葉～中葉。主体は晩期中葉	土器、石器、木器、漆塗櫛／花粉分析	三田史学会1959
					沢根地区（Bトレンチ） （木造館岡沢根75）	24㎡	縄文晩期中葉～後葉。主体は晩期中葉	土器、石器、骨角器、木器、土偶、円板状土製品、耳飾、籃胎漆器、漆塗櫛、自然遺物／花粉分析、塗料・顔料分析	
					近江野沢地区（C地点） （木造館岡沢根83-11？）	4㎡	縄文後期中葉～晩期後葉。主体は後期中葉・晩期中葉	土器、石器／花粉分析	
					近江野沢地区（D地点） （木造亀ケ岡近江野沢25-1？）	9㎡	縄文晩期前葉～中葉。主体は晩期中葉	土器、石器	
12	1973 昭和48	青森県教育委員会	緊急	発掘調査	沢根、亀山丘陵の東側低地部（木造館岡沢根41-2ほか）	472㎡	縄文前期末葉～弥生中期、歴史時代。主体は縄文晩期	土器、石器、土偶、土版、土製品、玉、ガラス玉、須恵器、珠洲焼、クルミ等植物遺体、アスファルト、木製品／ピット（歴史時代）／石材鑑定、花粉分析	青森県教育委員会 1974
13	1976～79 昭和51～54	市原壽文ほか	学術	ボーリング調査	近江野沢、沢根、津軽平野の一角にかけ南北600m、東西3.2kmの範囲で45地点ボーリング			古環境、古地形復元、^{14}C年代測定、花粉分析による古植生復元	市原ほか1980
14	1981～82 昭和56～57	市原壽文ほか	学術	ボーリング調査	沢根地区で4地点、近江野沢地区で1地点ボーリング （木造館岡沢根76ほか）		縄文晩期中葉	土器、石器、玉、クルミ／花粉分析、土壌分析、黒曜石分析、植物遺体同定、動物骨分析	市原ほか1984
15	1980 昭和55	青森県立郷土館 （第1次）	学術	発掘調査	沢根地区（A区） （木造館岡沢根75）	4㎡	縄文晩期中葉	土器、石器、玉、土偶、土版	青森県立郷土館 1984
					沢根地区（B区）の上層部 （木造館岡沢根74）	8㎡	縄文晩期中葉～後葉。主体は晩期後葉	土器、石器、玉、土偶、土版、クルミ、イネ／火山灰分析、土壌分析、花粉分析、黒曜石分析、黒曜石水和層年代・産地分析、植物遺体同定、イネ分析、動物骨分析	
16	1981 昭和56	青森県立郷土館 （第2次）	学術	発掘調査	沢根地区（B区）の下層部（木造館岡沢根74）	8㎡		土器、石器、漆付着縄、籃胎漆器、漆塗櫛、玉、アスファルト、動物骨分析	青森県立郷土館 1984
					沢根地区（C区） （木造館岡沢根75）	8㎡	縄文晩期前葉～中葉。主体は晩期中葉	土器、石器、玉	
					近江野沢地区 （木造亀ケ岡近江野沢28）	8㎡（表土のみ）	縄文晩期中葉～後葉	土器、石器、玉、籃胎漆器/花粉分析	
17	1982 昭和57	青森県立郷土館 （第3次）	学術	発掘調査	沢根地区（D区） （木造館岡沢根75）	20㎡	縄文晩期前葉～中葉。主体は晩期中葉	土器・石器・円板状土製品・石製品・玉／溝状遺構（現代）	
					雷電宮地区 （木造館岡沢根83-29）	54㎡	縄文後期前葉～晩期後葉。主体は晩期前葉～中葉	土器、土偶、石器、玉、線刻石、アスファルト塊、クルミ、籃胎漆器、漆器／土坑墓・ピット（晩期）／リン酸カルシウム分析、黒曜石水和層年代・産地分析、土坑墓土壌中の籃胎漆器の朱分析、動物骨分析	

	年代	調査主体	調査原因	調査方法	地点	面積	時期	出土遺物・検出遺構・自然科学分析	文献
18	2008 平成20	つがる市教育委員会	史跡周辺部の試掘調査	発掘調査	沢根地区、亀山丘陵の西側（A～Fトレンチ）（木造館岡沢根83-12・83-13、沢根83-17、木造亀ケ岡亀山30）	100㎡	縄文中期～晩期	土器、石器／フラスコ状土坑（後期）	つがる市教育委員会2010
					沢根地区、亀山丘陵の西側（木造館岡沢根83-14・83-20）	20㎡	縄文晩期中葉	土器／土坑墓（晩期中葉）、ピット（時期不明）、屋内炉?（近現代）	
19	2009 平成21	つがる市教育委員会	史跡周辺部の試掘調査	発掘調査	沢根地区、亀山丘陵の西北端部（木造館岡沢根83-49）	100㎡	縄文中期後葉～晩期中葉。主体は後期初頭	土器、石器／竪穴建物跡（晩期）、土坑・ピット（中～後期）、フラスコ状土坑（中期）、埋設土器（後期）、焼土遺構（中～後期）	
20	2010 平成22	つがる市教育委員会	下水道整備に伴う試掘調査	発掘調査	亀山丘陵を東西に横断する市道亀ヶ岡館岡線に試掘トレンチを15か所（木造館岡沢根83-37ほか）	60㎡	縄文晩期～弥生中期	土器、石器／土坑（縄文晩期・平安）、ピット（縄文）	つがる市教育委員会2012
21	2011 平成23	弘前大学北日本考古学研究センター	学術	ボーリング調査	低湿地でのボーリング調査19地点		縄文晩期	土器	上條編2014
22	2013 平成25	つがる市教育委員会	現状変更確認	発掘調査	亀山地区西部の宅地（木造館岡沢根83-52）	9㎡	縄文晩期前葉	土器、石器	本報告
			史跡内容確認	発掘調査	亀山地区東部の公有地（木造亀ケ岡亀山49-1・49-2	157㎡	縄文晩期～弥生前期。主体は晩期末葉～弥生前期	土器、石器、土偶、土版、玉／土坑（晩期）、溝跡（縄文晩期末葉～弥生前期）	
					亀ヶ岡地区西部の公有地（木造館岡沢根83-32）	22㎡	縄文晩期前葉～中葉	土器、石器、円板状土製品／竪穴状遺構・土坑墓（晩期前葉～中葉）	
					亀山地区南部の公有地化（木造館岡沢根83-35）	32㎡	縄文晩期（ごく少量）	土器	
23	2014 平成26	つがる市教育委員会	範囲内容確認	発掘調査	亀ヶ岡地区から続く史跡西側隣接地（木造館岡沢根83-17上）	35㎡	縄文後期初頭～前葉	土器・石器／土坑（後期）・フラスコ状土坑（後期）、ピット（後期）、溝跡（後期）	本報告
					亀ヶ岡地区から続く史跡西側隣接地（木造館岡沢根83-56）	17㎡		石器/遺構なし	
					亀ヶ岡地区から続く史跡南側隣接地（木造亀ヶ岡亀山57、館岡沢根83-2）	15㎡	縄文後期	土器・石器	
					沢根地区低湿地の南隣地 （木造館岡沢根82）	17㎡		陶磁器/遺構なし	
					亀ヶ岡遺跡隣接地	130㎡		遺構・遺物なし	
24	2015 平成27	つがる市教育委員会	範囲内容確認	発掘調査	亀ヶ岡地区から続く史跡西側隣接地（木造館岡沢根83-12）	55㎡	縄文後期	土器・石器／土坑・ピット（後期）	本報告
					亀ヶ岡地区から続く台地西端部 （木造館岡沢根83-5）	142㎡	縄文後期初頭～前葉	土器・石器／土坑・ピット（後期）	
					亀ヶ岡地区から続く台地西端部 （木造館岡屏風山373-1）	13㎡		遺構・遺物なし	
					亀ヶ岡地区から続く台地西端部 （木造館岡屏風山369-1）	14㎡	縄文後期？	土器	
					沢根地区低湿地の西隣地 （木造亀ヶ岡亀山24-1・26-1）	29㎡	縄文後期初頭	土器・石器	
25	2015 平成28	つがる市教育委員会	範囲内容確認	発掘調査	亀ヶ岡地区から続く史跡西側隣接地（木造館岡沢根83-8）	188㎡	縄文前期末葉～中期初、中期中葉、晩期前葉～中葉	土器・石器/竪穴建物跡（中期中葉）、フラスコ状土坑・土坑（前期末葉～中期初頭）、土坑墓、焼土遺構（晩期前葉～中葉）/^{14}C年代測定	本報告
					亀ヶ岡地区から続く史跡西側隣接地（木造館岡沢根83-50）	4㎡		石器/遺構なし	
					亀ヶ岡地区から続く史跡西側隣接地（木造館岡沢根83-51）	23㎡	縄文晩期中葉	土器（晩期中葉）	
					亀ヶ岡地区から続く史跡西側隣接地（木造館岡沢根83-14・83-20）	58㎡	縄文？	ピット	
26	2016 平成29	つがる市教育委員会	史跡内容確認	発掘調査	亀山地区北部の公有地（木造館岡亀山36-1）	106㎡	縄文晩期前葉～中葉	土器・石器・玉/土坑墓・土坑・ピット・埋設土器・焼土遺構（晩期前葉～中葉）/^{14}C年代測定、赤色顔料成分分析	本報告
					亀山地区西部の公有地（木造館岡沢根83-9）	120㎡	縄文前期末～中期初・晩期	土器・石器/フラスコ状土坑（前期～中期）、土坑墓、焼土遺構（晩期）/^{14}C年代測定、赤色顔料成分分析	
			範囲内容確認		沢根地区、亀山丘陵の西北端部（木造館岡沢根83-49）	69㎡	縄文中期後葉～後期初頭。主体は後期初頭	土器／土坑（中期後葉～後期初頭）	

文化５（1808）年、弘前城下紺屋町に生まれた平尾魯仙は、万物へ関心を向けた人物であり、『合浦奇談』巻之二「地下旧物　其三」では亀ヶ岡周辺から陶器が出ること、亀ヶ岡の出土品は上品であることなどを記録している。

尾張藩に仕えた江戸後期の儒学者である冢田虎（大峰）は、文政 12（1829）年刊行の漢文体随筆の『随意録』の一部に、津軽地方から帰った門弟から聞いた話として、亀ヶ岡遺跡より多くの遺物が出土することを記載している。その中で、出土土器の寸法を記した後に、丘陵部の表土に石が露出していて、それに伴い完形の甕型土器が出土することが描写されている。

3. 来訪者が記録した亀ヶ岡遺跡

18 世紀以降、亀ヶ岡遺跡を訪れた来訪者たちによる記録も残され、出土遺物を珍重する風潮とあわせて遺物が出土する場所である遺跡自体にも関心が向けられ始めていたことが分かる。このことから、亀ヶ岡遺跡は近代以前の日本考古学史上において重要な位置を占めていることが理解される。

寛政８（1796）年７月に亀ヶ岡遺跡を訪れた、三河国（現在の愛知県豊橋）出身の紀行家・本草学者である菅江真澄は、『外浜奇勝』や『追柯呂能通度』に亀ヶ岡遺跡から出土する土器やその出土地点などの情報を記した。『外浜奇勝』では、「堂の前」という神社があった付近では昔から土器が出土したことが記されており、最も古い亀ヶ岡遺跡探訪記として位置づけられる。なお、「堂の前」は現在の雷電宮付近に位置したと考えられる。『新古祝部品類之圖』には精製土器と思われる壺形土器の図を示し、「高麗人（大陸の人）が来て作ったものと地元民が話している」ことのほか、「蝦夷洲（北海道）にも同様な土器が出土する」ことから蝦夷が製作したとする考えを記している。土器製作者の推定とともに、亀ヶ岡式土器の北東北から北海道にかけての分布域を把握していたことが注目される（図 2-2）。

また、「北海道」の命名者としても知られ、弘化元（1844）年９月に亀ヶ岡遺跡を訪れた松浦武四郎は、『東奥沿海日誌　南』の津軽の項に、「亀ヶ岡」の地名について「恐らくハ瓶ヶ岡成べし。此辺古き陶器でるなり」と記した。

図 2-2　『新古祝部品類之圖』に記録された亀ヶ岡遺跡出土品（大館市立栗盛記念図書館提供）

4. 好事家に愛玩された亀ヶ岡遺跡出土品

19 世紀に入ると、江戸市中でも亀ヶ岡遺跡の出土品は珍重されたようである。雑学者山崎美成を中心として結成され、『南総里見八犬伝』の作者滝沢馬琴や画家谷文晁らが参加した「耽奇会」では、亀ヶ岡遺跡出土品が出品され、記録に留められている。その記録である『耽奇漫録』によると、文政７（1824）年の第１回の会合に「津軽亀ヶ岡にて掘出たる土偶人二躯」が、第８回の会合に「津軽亀ヶ岡より掘出す古磁器」が、文政８（1825）年の第 20 回の会合では谷文晁により「奥州甕岡山古磁器」が出品されている。出品された土器・土偶は図にも示されており、その特徴を今に伝えている。

第2節　蓑虫山人の発掘調査

1. 記録に残る最初の発掘調査

記録に残る最初の亀ヶ岡遺跡の発掘は、明治 17（1884）年に蓑虫山人によって行われた。蓑虫の本名は土岐源吾。現在の岐阜県、美濃国安八郡結村で天保７（1836）年に生まれ、青森・秋田などに

長く滞在した「放浪の絵師」で造園家でもある。

青森県における蓑虫の足跡は、明治 11（1878）年秋ごろから 20 年までに見られる。明治 12（1879）年 12 月に弘前で平尾魯仙に面会したほか、下澤保躬（しもざわやすみ）や佐藤部（さとうしとみ）らと交流を持ち、遺跡や考古遺物等の情報交換を行っている（青森県立郷土館 2008）。

明治 17（1884）年 11 月、蓑虫は記録に残る最初の発掘を行った。個人蔵「山人写画」（絵日記青森編）の 18～70 ページは明治 13～17 年に訪れた先々でのことを描いているが、なかでも「舘岡村における遺跡発掘之図」は明治 17 年の発掘風景を描いたもので、「亀ヶ岡遺跡初の発掘報告」とも言えるものである（図 2-3）。

図 2-3　「舘岡村における遺跡発掘之図」（個人蔵、写真提供　青森県立郷土館）

近江野沢の西側低湿地の崖際と推定される明治 17（1884）年の発掘時の絵。右端の人物が蓑虫本人

画中の書き込みによると、①発掘は明治 17 年 11 月初めに行われたこと、②村のうち少し高いところを「亀ヶ岡」といい、③この丘より古くから土器が出て様々な形があり素焼きで古く見えること、④古に亀ヶ岡には津波が何度もあり、その流水で埋まったものもあるようだが、記録はなく人が言い伝えるのみであること、⑤人を雇って発掘したこと、⑥数多く得られた遺物のなかで、土偶や杯状の土器は珍しいものだと悦んだこと、などが記されている。絵を見る限り、この発掘風景は近江野沢低湿地の西縁突端部の崖下部を西側から描いたものと推定される。

2. 明治20年の再発掘

明治 20（1887）年４月上旬の３日間、蓑虫は亀ヶ岡遺跡を再発掘し、『東京人類学会報告』2 巻 16 号に「陸奥瓶岡ニテ未曾有の発見　津軽ノ蓑虫翁ノ手柬」（蓑虫 1887）として報告された。本報告は、４月 14 日付の報文で、蓑虫報告の後に神田孝平の補足・添え書きがある。蓑虫は前年の明治 19 年７月、浪岡で神田孝平と面会した。神田によれば、蓑虫は亀ヶ岡遺跡から出土した壺で煙草入れを作り、土偶の首を根付としていた。また、人によると蓑虫は茶道具一切を亀ヶ岡遺跡出土土器で取り揃えているとの記述もある（神田 1887a）。報文によると発掘では、地元の人とともに土を１尺（約 30 ㎝）ほど掘ったところ、突然、瓶・石剣・曲玉（勾玉）・人形（土偶）、磬石（けいせき）1 個および管玉無数の入った壺が出土したとされる。

蓑虫は、亀ヶ岡で曲玉・磬石・管玉の発見は前代未聞であること、また磬石は、「天下の絶品として人目を驚かす」玉質美沢ものと語っている。土偶は、「男女２人を模したる者」との見解を示している。また、土偶については、ともに発掘した地元民たちが所有権を争い毀損してしまったこと、瓶や人形

（土偶）の完形品は非常に高値が付き手が出ないことなどを述べている（蓑虫前掲）。

蓑虫報告の末尾に「図が後便に託し」とあるが、翌月の『東京人類学会報告』2巻17号の神田孝平（神田 1887b）による「古土器図解（巻末石版図ヲ見ヨ）」の「第十五版」に示される4点の土器が、「津軽ノ瓶岡ヨリ出タル者ナリ原品今皆我ガ庫中二存セリ」とあるように、作図のために蓑虫より神田の手元に送られた明治20年の発掘出土品の一部と推定される（図2-4）。蓑虫から神田孝平にわたったと考えられる亀ヶ岡遺跡出土品の一部は、「本山彦一コレクション」として現在関西大学博物館に収蔵されている（青森県立郷土館 2008）。

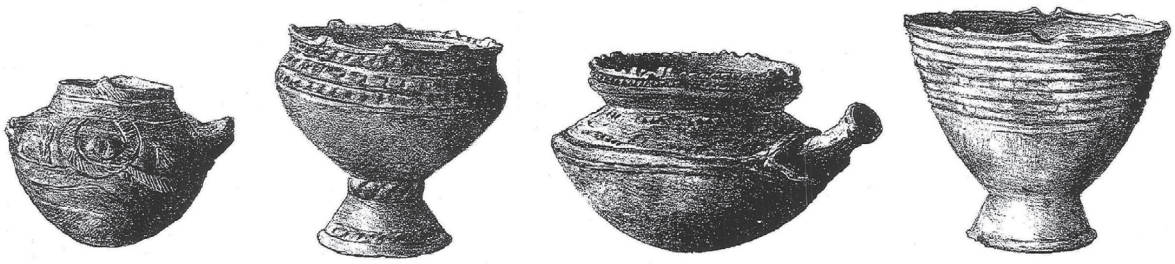


図2-4　明治20年蓑虫山人発掘と推定される出土品（神田 1887b より作成）

3. 蓑虫山人と神田孝平の功績

神田孝平（1830～1898）は美濃国不破郡岩手村に生まれ、江戸幕府の洋学者から立身した明治政府の高官であり、兵庫県知事、文部少輔、元老院議官、貴族院議員を歴任した。学者としては、幕府では蕃書調所の教授から開成所頭取となり、その学識は経済学、法学、数学、天文学、人類学など多岐にわたった。特に明治初期の地租改正事業に果たした役割は大きく、神田の「税法改革ノ議」（明治2年）および「田税改革議」（明治3年）等での「沽券税法」導入の建議により、政府の税制改革は本格化したと評価されている（福島 1962）。

官界での職務の傍ら、神田は東京人類学会や東京数学会社（現日本数学会）など各分野の学会長を歴任した。こうした経歴を有する神田孝平と蓑虫山人との交流は、同郷（岐阜県出身）であったこと、そして両者とも考古学や古物に造詣が深いという共通項がなしえたものと考えられる。蓑虫の資料は結果として散逸しているが、神田の手に渡ったものの一部は現在も確認できる。また明治19年に、東北一周旅行中の神田と蓑虫が浪岡で面会したことを契機として、蓑虫による亀ヶ岡遺跡の発掘等の情報が中央の学界に知られることになる。また蓑虫は明治20年8月に上京して神田に再会し、その際に土器など、亀ヶ岡遺跡の出土品を贈呈したのではないかと指摘されている（村越 2007）。この蓑虫と神田の交流により亀ヶ岡の情報が直接中央に伝わり、注目されたことが、亀ヶ岡遺跡を近代日本の考古学史上に登場させる第一歩となったと考えられる。

第3節　遮光器土偶の出土と佐藤蔀・神田孝平による報告

明治20（1887）年閏4月11日、現在の暦に直せば6月2日（木）に亀ヶ岡遺跡南部の沢根低湿地の苗代より、亀ヶ岡遺跡の出土品として最も有名な大型遮光器土偶が出土した（巻頭写真6上、図2-20・2-21）。同年、黒石在住の人類学会員佐藤蔀が『東京人類学会雑誌』3巻21号に土偶の石版図を紹介している（佐藤 1887、巻末資料1）。

この石版図のほか、佐藤蔀蒐集資料を引き継いだ成田彦栄コレクションの「考古画譜」のなかに遮光器土偶の図があり、図の付箋によれば硯がともに出土したことが記されている。同図は石版図の原

画の可能性が指摘されている（関根編 2009・青森県立郷土館 2012、巻末資料 2）。翌明治 21 年には、佐藤蔀が紹介した石版図の解説が神田孝平により報告され、土偶が中空であることや冠部や眼部表現の特徴、欠損状況、他遺跡出土資料の類例等について指摘された（神田 1887、巻末資料 3）。この石版図入りの学界報告が坪井正五郎の「ロンドン通信」や「コロボックル風俗考」等の反響を呼び（坪井 1890・1891・1895a）、石器時代の風習を考察するための物証として多くの研究者に引用され、現在に至るまで遮光器土偶研究の基準資料として極めて重要な位置を占めている。

なお、遮光器土偶は昭和 31（1956）年 5 月 14 日に青森県重宝になり、翌 32 年 2 月 19 日に国の重要文化財に指定されている。重要文化財に関して考古遺物という分類のない段階の指定であり、純粋に美術的な観点から価値が認められたものである。長らく個人所蔵であったが、昭和 61 年度に文化庁に譲渡され、現在は東京国立博物館が所蔵する。

第4節　東京帝国大学理学部所属の研究者による発掘調査と踏査

1. 若林勝邦による最初の学術調査

学史上初となる亀ヶ岡遺跡の学術調査は、前述の蓑虫山人による発掘や遮光器土偶の発見から 2 年後、明治 22（1889）年 7 月に若林勝邦によって実施される。若林勝邦（1862～1904）は東京物理学校（東京理科大学の前身）を卒業後、帝国大学理科大学（現在の東京大学理学部）技手を務めており、欧米留学で不在であった同助手の坪井正五郎に代わって、日本各地で発掘調査を行っていた。坪井らが結成した東京人類学会にも結成翌年の明治 18（1885）年に入会しており、若林は当時その幹事を務めていた。

調査報告は、「陸奥龜岡探求記」として『東洋學藝雑誌』に掲載された（若林 1889、巻末資料 4）。その調査実施の経緯を記した序文内には、「何故ニ龜岡村ハ此等ノ土器ヲ発見シ得ルヤ」、「何故ニ此土器ハ縄紋アルニカゝハラズ精巧ナルヤ」、「此土器ノ他ニ發見セラルゝモノナキヤ」といった疑問点が提示されている。それまでの「考説ヲモ記セズ單ニ愛玩ノ具ニ供セシノミ」であった発掘とは一線を画する、学問的な調査を志向していたことが分かる。

調査期間は 7 月 24 日～31 日の 8 日間で、24 人の人夫が従事している。調査地点は屏風山丘陵中の亀山地区であるとのみ報告されており、地形図や土層図も作成されていないため、具体的な地点は特定できない。なお、調査当時の亀山地区周辺には、過去に愛玩品の採集目的で行われた発掘の際に選別され放棄された、遺物の小破片が所々に散布していたと記されている。若林は発掘を行う一方で、それらの散布資料の中からも土器や土偶、石器などを拾い集めている。

出土品は、土器の部・石器の部・獣骨の 3 類に分け報告されている。土器の部には「土偶・徳利形の土器・高杯形の土器・壺・鉢・土管・皿」などがみられる。石器の部には「石鏃・石斧・石匕・皮剥具・石棒・石錐・庖刀類・楕円形の凹みある石器・偏平にして両端を打欠きし石器」などがみられる。土偶（遮光器土偶の破片を含む）・土器・石器のそれぞれ一部には遺物図が付されており、大きさや特徴の詳細な記述がある。

そして、若林は出土品を観察したうえで、亀ヶ岡遺跡の性格について

第一　龜岡村字龜山ハ古代ノ土器ヲ發見スルノミナラズ石器、骨器、獣骨ヲモ發見スルコト

第二　此處ヨリ得ル土器、石器、ハ皆本邦石器時代ノ遺蹟ヨリ發見スルモノニ等シキコト

第三　土器ハ皆精巧ニシテ本邦石器時代ノ土器中其比ヲ見ル少キコト

第四　土偶ヲ數多發見ス而ソ其服飾ハ當時ノ風俗ヲ見ルニ足ルベキコト

第五　石器ハ皆精製ニシテ麁製石器ハ一モ混ゼザルコト

第六　獣骨ハ發見スルモ貝殼ハ一片モ發見セズ貝塚タリシ証ヲ認メザルコト

の 6 点を挙げている。さらに考察として、土偶の服飾がアイヌ民族と異なっている点や、土器製法が

進歩している点から、亀ヶ岡遺跡はアイヌ民族ではない他の人種による遺跡であると推定している。これは日本考古学の黎明期における時流であった、石器時代人種論によるものであった。その一方で、亀ヶ岡遺跡は関東地方の石器時代遺跡と時代を等しくするも、遥かに後期に属するものである、という考察がこの報告において既に行われていることは注目される。

2. 佐藤傳蔵による2回の調査

今日の亀ヶ岡遺跡の評価を大きく方向づけたのは、明治 28（1895）年と翌年の２回にわたる佐藤傳蔵の来訪と発掘調査である。

佐藤傳蔵（1870～1928）は地質学・鉱物学を専門としていたが、帝国大学理科大学地質学科（現在の東京大学理学部）を卒業後は同人類学教室で助手を務めており、欧米留学から帰国後に教授となっていた坪井正五郎のもとで、考古学の研究についても広く行っていた。

佐藤による２回の調査は、『東京人類學会雑誌』および『東京地学協会報告』（佐藤 1896f、巻末資料 5）に報告されている。１回目の調査は、明治 28（1895）年に実施された（佐藤 1896a）。同年 10 月３日より、佐藤は東京帝国大学の人類学調査の一環として青森・秋田・岩手の３県を巡っている。その際に亀ヶ岡遺跡へ立ち寄り、数日間を費やし発掘調査を行った。

発掘地点だが、はじめに低湿地の数箇所を試掘したところ過去の盗掘痕が明瞭であったため、次に台地上の亀山地区で試掘を行った。しかし、目立った遺物は出土せず、再び沢根地区の低湿地（木造館岡沢根 76 付近と推定される）に降りて苗代の掘削を行い、ここで多数の遺物を検出している。

佐藤は地質学科卒業だったこともあり、調査地点の土層について詳細な報告を行っている。遺物は特に、灰色砂質泥土層の下部と褐色泥炭層で多く出土しており、地層の堆積年代および種類から、亀ヶ岡遺跡における居住時期と周辺環境を推定できるとしている（図 2-5）。

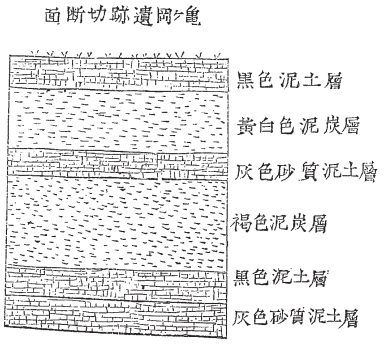


図 2-5　明治 28 年佐藤傳蔵発掘調査地点土層断面図（佐藤 1896a）

遺物は石器・土器ともに多くの図版が掲載されており、特徴の記述も豊富である。石器は完成石器と半成石器（未成品）とに分けて報告されている。佐藤はこれらの石器の観察を通して、石斧が少ない点に着目するほか、石器表面の微細な痕跡について「一種の金属器を使用したりとの念慮を強からしむるものあり」と述べている。土器は、器種別では「壺形・コップ形・徳利形・猪口形・瓶形・急須形・高坏形」が出土した。ここでは著しく高坏土器が多い点や、塗物土器の割合が多い点などが指摘されている（図 2-6）。

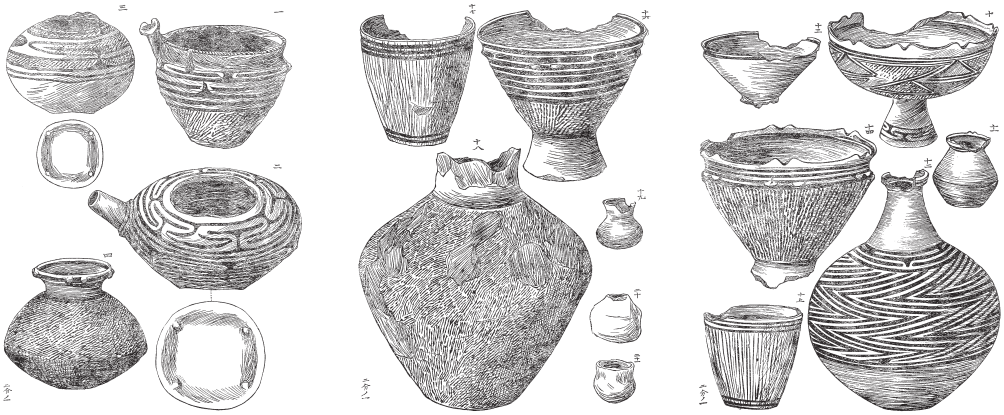


図 2-6　明治 28 年佐藤傳蔵発掘調査出土遺物（佐藤 1896a）

２回目の調査は明治 29（1896）年に実施された（佐藤 1896b・c）。この年の３月、当時の館岡村長であった野呂武左衛門らは亀ヶ岡遺跡の発掘を計画しており、前年に調査を行った帝国大学へも案内を送付した。これを受け佐藤は４月末に青森へ向かい、細越村（現在の青森市）の調査をしたのち館岡村へ入った。発掘は同年５月１日～14 日にかけて行われ、延べ 132 人の人夫が従事した。また、東京人類学会の会員でもあった佐藤蔀（第３節参照）も調査に参加している。

調査地点は前回の発掘箇所より北に２町（約 120m）の低湿地で、近江野沢地区にあたる。特に、台地の端から北に４間（約 7.2m）の地点を重点的に発掘しており、現在の木造亀ケ岡近江野沢 25-1～25-3 に相当する。

土層は、東西と南北それぞれの断面に分けて報告されている。東西の土層における遺物包含層は、木炭・灰・焼土が混入する雑色泥土と紫色泥炭質泥土であり、南北の土層でも特に雑色泥土から多く遺物が検出される。

出土遺物は細かく分類して報告が行われた。天然物には、黒曜石をはじめとする岩石類や動植物遺体がある。人工物には赤色顔料・石器・土器のほか、動物性のものとして「骨器・角器・貝器」がある。土器には、「皿形・高坏・椀形・壺形・徳利形・急須形」などがある。他の遺跡と比較して、器種の少なさを指摘するとともに、壺形が全体の７割を占める点が亀ヶ岡遺跡の特徴であると佐藤は述べている。また、土偶と動物形土製品も出土しており、とりわけ土偶の破損部分を漆と思われる接着剤で修復している点について注目している（図 2-7）。

図 2-7　明治 29 年佐藤傳蔵発掘調査出土遺物（佐藤 1896b）
下段図の左隅に「大の雲外写」の筆記がある

3. 佐藤傳蔵の津波説とその意義

佐藤傳蔵の調査は、明治 22（1889）年の若林勝邦による発掘に続く、最初期の学術目的による調査であった。その報告では、出土遺物の解説や図版の詳しさもさることながら、地質学の視点に基づいた、地層の堆積状況や土壌の特徴に関する記述にも重点が置かれていた。

加えて、遺物と土層の関係性についても多くの言及がなされた。当時知られていた石器時代遺跡では、主に台地のローム層直上から多く遺物を検出していた。対して、亀ヶ岡遺跡では低湿地の、とりわけ泥炭層中に遺物を包含することが調査を通して分かった。この点に関して、佐藤は「遺物現出の有様大に其趣を一般既知のものと異にする」と指摘している。

さらに特筆すべきは、泥炭層遺跡としての亀ヶ岡遺跡の成因について、初めて考察したという点である。第２回調査で発掘した近江野沢地区では、泥炭層に遺物とともにシジミなどの貝殻が混じっていた。佐藤は貝類が食用にされていたと推定し、当時の亀ヶ岡遺跡の低湿地を含む津軽平野の沖積層は、貝が生息できる湖のような環境であったと考察した。そのうえで、低湿地から遺物が出土する理由として、①低湿地が居住場所であった、②水の作用や人力により運搬された、③地震により台地から転落した、という３つの仮説を提示し、それぞれ検証を行った結果、いずれも想定しがたいとした。

そして、佐藤は最も可能性の高い説として、海嘯（津波）が亀ヶ岡遺跡を襲ったと主張する。これは、２回目の調査直後の明治 29（1896）年６月 15 日に発生した、明治三陸地震に伴う大津波から着想を得たものであることが記述からうかがえる。すなわち、日本海で発生した津波が当時は湖であった津軽平野に侵入し、台地上の居住地を押し流した結果、地盤の一部とともに遺物が低地に転落したという仮説である。その津波説を補強する証拠に、砂層を挟んだ上下２層で同時期の土器が出土する点や、土器の中に海藻が渦を巻いた状態で検出される点を挙げている。

佐藤によって津波説が提唱されて以降、亀ヶ岡遺跡の成因を巡っては諸説が展開される。後述のように、佐藤の仮説は昭和初期の中谷治宇二郎や小岩井兼輝による論考、および戦後の慶應義塾大学による調査にも影響を与えている。加えて、佐藤の報告中において初めて、泥炭層という観点から亀ヶ岡遺跡の特殊性が指摘されたのであり、学史における佐藤傳蔵の調査の意義は非常に大きいといえる。

4. 佐藤傳蔵による亀ヶ岡遺跡と田小屋野貝塚の比較

佐藤傳蔵は、亀ヶ岡遺跡の第２回調査の際、田小屋野貝塚の調査も実施している。調査地点や出土遺物等の詳細は不明であるが、他遺跡での遺物出土層とは異なり、黒色土層下のローム層中に多量の土器片が包含されることを報告している（佐藤 1896d）。佐藤は遺物出土状況の類例をヨーロッパ諸国に求めながらも、遺物の特徴に違いが認められることを根拠に日本における洪積世人類の存在に慎重な見解を示す。注目すべきは、この報告中で亀ヶ岡遺跡と田小屋野貝塚を比較し、立地や遺物包含層の違いを指摘している点である。佐藤の見解によれば、「高塁の地」にあり洪積層から遺物を出す田小屋野貝塚に対し、亀ヶ岡遺跡は「低濕の地」にあり沖積層から遺物を出すと特徴づけられる。なお、田小屋野貝塚のローム層中より多量の土器片が出土するという佐藤の見解は、後に山内清男により批判され、オセドウ貝塚等に見られる「褐色土中の薄い遺物層」の間層をローム層と誤認した可能性が指摘される（山内 1929）。「褐色土中の薄い遺物層」およびその間層は、現在の理解では「盛土遺構」に相当すると考えられる。

亀ヶ岡遺跡が低湿地に立地するという佐藤の理解には、第１回調査における亀山丘陵と沢根低湿地の対照的な調査結果が大きく影響していると考えられるが、この理解が後学の研究者に引き継がれ、昭和初期に沢根低湿地が重点的に調査されるに至る。

5. 柴田常恵の踏査

柴田常恵（1877～1954）は明治から昭和期にかけての考古学者であり、内務省（のちに文部省）の嘱託となって史跡名勝天然記念物の調査に従事した。柴田は史学館を卒業後、明治 35（1902）年に東京帝国大学理学部（現在の東京大学理学部）の人類学教室に入り、やがて助手を務めている。

この助手の時期にあたる大正６（1917）年８月 27 日、柴田は館岡村を訪れて亀ヶ岡遺跡の踏査を行った。踏査に関する詳細な記録は残っていないが、國學院大學所蔵の柴田常恵写真資料の中には、現地で撮影した写真が２枚残されている（國學院大學オンライン・データベース）。１枚は低地の水田から亀山地区の丘陵を望んだ写真であり、比較的広い水田であることから近江野沢地区と推定される。もう１枚は谷の奥部の低湿地で撮影された写真であり、沢根地区の雷電宮南側地点と推定される。

第5節　沢根低湿地の発掘調査と「泥炭層遺跡・低湿地遺跡」としての評価の確立

沢根低湿地の発掘調査に基づき、亀ヶ岡遺跡の特殊性が泥炭層からの遺物出土にあるとの評価を与えた佐藤傳蔵の調査研究成果について第４節で触れた。甲野勇は、植物性遺物探求と泥炭層遺跡調査の歴史を振り返る中で、①日本で最初に発見され、学術調査が試みられたのが亀ヶ岡遺跡であり、その泥炭層遺跡としての性質を決定したのは佐藤傳蔵であること、②佐藤が地質学専攻であったため遺跡の調査が理想的に実施されたが、植物質遺物は不幸にして出土しなかったことを挙げ、亀ヶ岡遺跡と佐藤の調査研究を意義付けた（甲野 1935）。その後も泥炭層遺跡としての亀ヶ岡遺跡の重要性は繰り返し指摘され、昭和初期には沢根低湿地の発掘調査が重点的に実施される。

中谷治宇二郎は『日本石器時代提要』において、遺物の包含状況をもとに遺跡の類別を検討し、「泥炭層中の包含地」の例として、是川遺跡・真福寺貝塚とともに亀ヶ岡遺跡を挙げ（中谷 1929b・1943）、発掘調査によりその出土状況の解明を試みた。小岩井兼輝の調査も、泥炭層あるいは粘土層から多量の遺物が出土する状況を地質学的に解明することを目的としていた。

1. 中谷治宇二郎の発掘調査

中谷治宇二郎（1902～1936）は、東京帝国大学理学部の人類学教室に学生として在籍していた時期、東北地方において積極的に調査を実施していた。昭和３（1928）年７月下旬から約３週間は津軽地方をフィールドとしており、現在のつがる市内を含む各地で調査を行っている。その成果は、「東北地方石器時代遺跡調査豫報」として『人類學雑誌』に掲載された（中谷 1929a）。報告では、亀ヶ岡をはじめとする各遺跡の踏査・発掘調査のほか、津軽地方の古環境の復元についても言及がなされている。

亀ヶ岡遺跡での発掘調査は、沢根地区の低湿地の畦道で実施された。地形図によると、調査地点は現在の木造館岡沢根 76 番地の南辺であり、慶應義塾大学の調査（第４章第２節参照）におけるＡトレンチの西側にあたる（図 2-8）。調査当時の亀ヶ岡遺跡の状況について中谷は、永年の売買目的の発掘によって既に遺跡のほとんどが姿を消そうとしている、と記している。実際にこの時の調査地点も、数か所を試掘した中で唯一の未盗掘箇所であった。

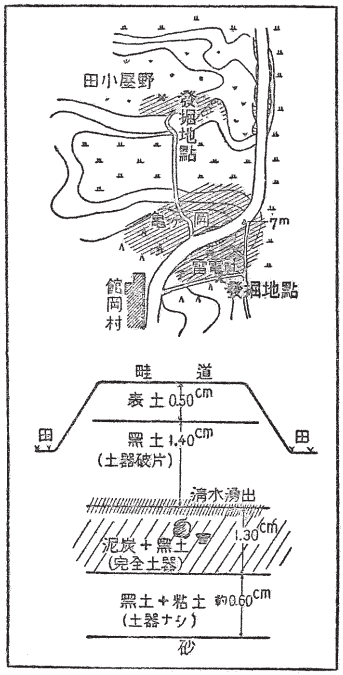


図 2-8　中谷治宇二郎発掘調査地点（中谷 1943）

土層は、表土が 50 ㎝で遺物は含まれていなかった。第二黒土層は 1.4mで、多くの土器片が出土したが包含の状態は悪く、二次堆積と推定している。その下に黒色の泥炭層が 1.3m堆積しており、完形土器が出土している。最下層には遺物を含まない粘土質の黒土層が 60 ㎝堆積し、基盤の砂層に至っている。なお、出土遺物の詳細およ

び図版は記載されておらず、出土点数についても不明である。

遺物が低湿地の泥炭層から特に多く出土する点について、中谷は泥炭地を生活地表とすることは可能性に乏しいとしたうえで、当時乾燥していた生活地表が一旦沈下して十三湖の水を導き入れ、結果として泥炭層を生じたと考察している。同時に、泥炭層における遺物の出土状態は「決して雨水其他に依て流れ寄つたものではない」と述べ、佐藤傳蔵が指摘したような、津波等による二次移動は想定しがたいとしている。

2. 小岩井兼輝の発掘調査

小岩井兼輝は旧制弘前高等学校（弘前大学の前身）の教授を務め、地質学や地理学などの地学分野を専門としていた。昭和９（1934）年に小岩井は、亀ヶ岡遺跡において地質調査および発掘調査を実施しており、その成果は「龜ヶ岡新石器時代遺跡と過去水準の變化に就て」の題で報告がなされた（小岩井 1934）。地学分野が専門であった小岩井が調査を行った理由として、亀ヶ岡遺跡では地下の泥炭層、あるいは粘土層から多量の遺物が出土すると指摘したうえで、「斯く土石器の地下深所に存することは（中略）人類學的研究以外に立ちて地質學的推論を要すべきものと筆者は考定するに至れり」と記している。

報告内では、亀ヶ岡遺跡の地質について、近隣の出来島や高山稲荷、および弘前方面の台地や岩木川低原（津軽平野）の地質と比較を行っている。そして、岩木川低原の周囲の台地はいずれも洪積世に属すとし、地層内に泥炭を挟むか否かに関して注目している。加えて、亀ヶ岡遺跡とその周辺遺跡で発見される遺物・遺構の存在場所について、地上分布と地下分布の２種類に分類している。地上分布はローム台地の露出面、地表～地表下３尺（約 90 ㎝）で出土するものを指し、地下分布は泥炭および粘土層中、地表下２～３ｍで出土するものを指してそれぞれ区分する。

発掘調査は２地点で実施された。雷電宮鳥居下の地点（現在の木造館岡沢根 83-26～76 付近か）では、斜面と低湿地の境界部分を深さ約３ｍ掘削し、最下層はロームに達している。ここでは直立する樹根がロームに根を張った状態で検出されており、泥炭層に包まれた樹根の上部周辺からは土器片が出土した。また、雷電宮の西側、沢根の谷の最奥部にあたる地点でも斜面と低湿地の境界部分の掘削を行っており、こちらは深さ約２ｍである。泥炭層とその下層の黒色粘土中からは、完形の壺形土器が４点まとまった状態で出土したほか、土器片・石鏃・石匙・石棒の破片が出土している。さらに、粘土層中で「貝塚」を検出しており、シジミ・ハマグリ・アカガイ・アサリといった貝殻とともに、周囲からは獣骨や骨器・土錘などが出土した。

以上の低湿地における遺物の分布について、小岩井は先行研究での津波による運搬説に触れつつ、風や雨によって遺物の移動が起こる可能性を指摘する。しかし、「黒色泥土中の小範圍に同種の土器相並びて完全に存在せるものあること」や「貝塚が黒泥中に遺跡を止め其中に獣骨破片、骨器及角器の存在せること」など４点の特徴を挙げ、台地のみならず低地でも居住が行われていた証拠としている。この生活面が地殻降下運動によって水面下に没した結果、泥炭植物に被覆されたと考察した。

3. 吉田格の発掘調査

縄文時代の研究者で、日本考古学研究所や東京都立武蔵野郷土館に所属した吉田格（1920～2006）も、昭和 15（1940）年に調査を実施している（立正大学文学部考古学研究室 1990）。この年の７月 31 日、立正大学専門部地理歴史学科の学生であった吉田は、館岡の蛯名家を訪れた。ここで蛯名氏自身が亀ヶ岡で発掘した多くの遺物を実見した吉田は、翌日の８月１日に試掘調査を行った。

まず、雷電宮南側の斜面になっている農道の２か所で試掘をしたが、いずれも盗掘箇所であったため、次に泥炭層（現在の木造館岡沢根 83-26～76 付近か）を発掘した。土層は水田の耕作土が約 30

cm、最近までに堆積した泥炭の無遺物層が約１m、その下に多量の遺物を含む泥炭層が約30cm堆積し、基盤の砂層に達している。なお、この調査地点でも一部で盗掘の痕跡が確認されている。遺物は壺形のミニチュア土器や土偶の頭部などのほか、特に土器片が多く出土した（図2-9）。また、表面採集した遺物として石鏃と玉類も報告されている。

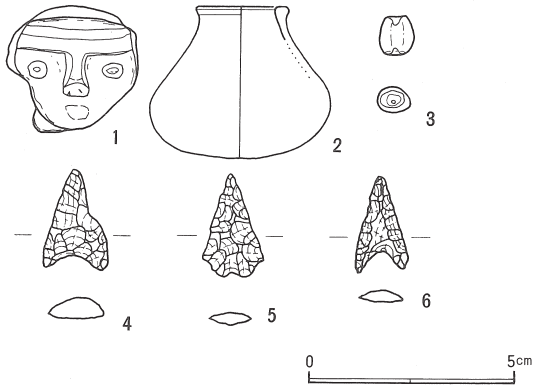


図2-9　吉田格発掘調査資料（立正大学文学部考古学研究室1990）

4. 植物性遺物に対する認識の高まりと籃胎漆器などの報告

大正から昭和期に史前学研究所を主宰した大山柏は、大正12～14（1923～1925）年にかけてヨーロッパに留学した際に、木製の居住施設や木道等が検出された泥炭層遺跡の調査をドイツで見学しており、泥炭層遺跡から出土する植物性遺物に早くから注目し、その調査の必要性を指摘していた（阿部2004）。大正15（1926）年11月の大里雄吉による是川中居遺跡の発掘調査以前、一般に知られていた唯一の泥炭層遺跡が亀ヶ岡遺跡であり、その発掘調査は大山の懸案となっていた。しかし、遺跡が遠方に所在することと、泥炭層の保存状態が不明のため、調査の実現には至らなかったとされる（甲野1935）。そうした中、大正15年および昭和３・４（1928・1929）年に実施された是川中居遺跡の南低湿地の発掘調査では、へら形木製品、網代様編物、漆塗り腕輪・弓、飾り太刀等が出土し、縄文時代晩期における植物質遺物の豊富な内容が学界に知られるようになる（大里1927、甲野1930、喜田・杉山1932）。さらに、大正15年11月には埼玉県真福寺貝塚から「赤塗漆器」の出土したことが甲野勇により確認され、次いで実施された大山史前学研究所による発掘調査の結果、泥炭層中から各種遺物とともに籃胎漆器の出土が確認された。

こうした研究動向にあって、植物性遺物の解明を目的とする亀ヶ岡遺跡の調査はついに戦前実施されることなく、先述の大山の目的意識は昭和25（1950）年の慶應義塾大学の発掘調査に引き継がれ、籃胎漆器等の植物性遺物の発見につながっていく。

発掘調査とは別の動きとして、江坂輝彌は館岡の蛯名家の所蔵品中から、籃胎漆器や頭部に植物の蔓を巻きつけた石棒等の存在を報告している（直良・江坂1941）。これに先立ち昭和７（1932）年に刊行された『日本石器時代植物性遺物図録』（喜田・杉山1932）中には亀ヶ岡遺跡出土資料の紹介がなく、江坂らにより初めて亀ヶ岡遺跡における植物性遺物の存在が報告されたと考えられる。

第6節　縄文土器研究の進展と「亀ヶ岡式」・「亀ヶ岡文化・文化圏」の用語の成立

1. 基準資料としての亀ヶ岡遺跡出土資料

上記のように、亀ヶ岡遺跡から出土する土器や土偶は、その美術工芸的価値とともに遺存状態の良さから江戸時代の好事家に愛玩され、明治期から昭和初期にかけて東京帝国大学人類学教室に所属する研究者を中心とした発掘調査・踏査が継続して実施されてきた。こうした長年月に及ぶ資料の蓄積により、亀ヶ岡遺跡出土資料は次第に基準資料としての役割を果たすようになる。

亀ヶ岡遺跡から出土する遺物は、若林勝邦・佐藤傳蔵・大野雲外等により『東京人類学会雑誌』において図版入りで頻繁に紹介される。昭和期に入って刊行される遺物集成図録においても、杉山寿栄男の『原始文様集』・『日本原始工芸』・『日本原始工芸概説』・『日本考古図録大成』等で土器や土偶が写真や図版で紹介され、沼津貝塚や是川中居遺跡出土資料とともに東北地方の縄文時代晩期を代表する資料として評価の定着を見る（図2-10・2-11、杉山1924・1928a・1928b・1931）。特に『日本原始工芸』の図版には亀ヶ岡遺跡出土の土器・土偶・土版・石器・骨角器等の各種遺物が多数掲載され

るが、亀ヶ岡遺跡を含めた複数遺跡の同種遺物が同一図版中に並べられるという図版組みの特徴を有する（図 2-11）。このことから、大正末期から昭和初期にかけて、亀ヶ岡遺跡と他遺跡の出土遺物を比較することのできる集成資料が杉山により整備されつつあった状況が窺われる。

土器に施文される文様の展開図は、早くは明治期の『模様のくら』（大野 1901）、昭和期に入っては上記の『原始文様集』・『日本原始工芸』・『日本原始工芸概説』等で集成および分類が進められ、現在普及している文様類型化の基礎が築かれるが、こうした研究作業の中でも亀ヶ岡遺跡出土資料が重要な位置を占めている（図 2-12）。

図 2-10　『原始文様集』に掲載された亀ヶ岡遺跡出土遺物（杉山 1924）

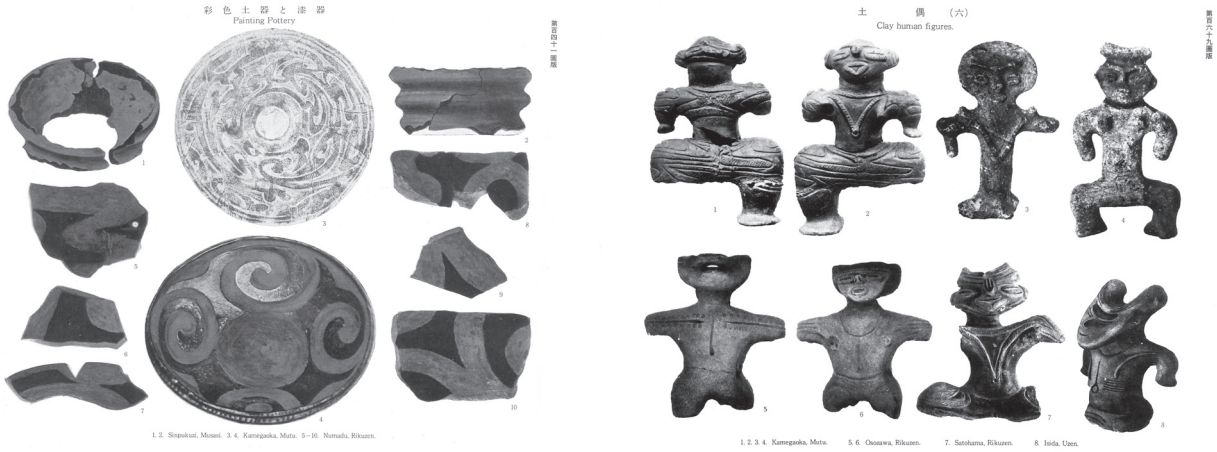


図 2-11　『日本原始工芸』に掲載された亀ヶ岡遺跡出土遺物（杉山 1928a）
左図版：「彩色土器と漆器」（中央 2 点が亀ヶ岡遺跡、左右上は真福寺貝塚、その他沼津貝塚出土）
右図版：「土偶」（上段が亀ヶ岡遺跡出土、下段左から獺沢遺跡、里浜貝塚、石田出土）

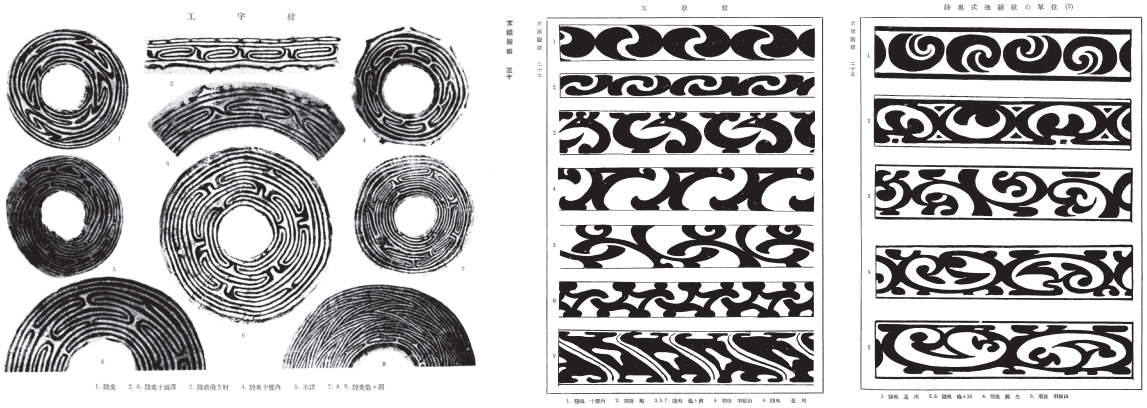


図 2-12　『日本原始工芸』に掲載された亀ヶ岡遺跡ほかの土器拓本と文様展開図（杉山 1928a）

2. 大別・細別型式としての亀ヶ岡式の設定

近代考古学の発達および発掘調査の蓄積により達成された縄文土器の分類・編年・地域性の研究においても、亀ヶ岡遺跡の果たした役割は無視できない。東北地方の縄文時代晩期における一群の特徴的な土器は、大正期以降、松本彦七郎・鳥居龍蔵・中谷治宇二郎・甲野勇・八幡一郎により「獺沢式」・「宮戸式」・「出奥式」・「陸奥式」・「奥羽式」等と呼称されてきた。長谷部言人は宮城県里浜貝塚の分層発掘成果を報告し、粗製土器の「宮戸式」に対して精製土器を「亀岡式」と呼称した（長谷部 1919）。この中で長谷部は、「亀岡式」を「陸奥津軽地方に代表を有する土器の類にしてアイノ木器に似たる彫刻文様を有し、沼田頼輔氏の所謂亀岡式把手及び多数の縁突起を有す」と定義づけ、陸前地方にも類例が出土することを指摘する。さらに、大正 14 年の岩手県大洞貝塚の発掘調査報告の中で「所謂亀ヶ岡式或は奥羽薄手式」が地点別・層位別に細分されることを指摘している（長谷部 1925）。長谷部言人は、東北地方縄文時代晩期の土器群の総称として「亀岡式」・「所謂亀ヶ岡式」を使用しており、大別型式名として亀ヶ岡式の用語を使用する嚆矢と捉えられる。

昭和５年、山内清男は上記の学史を整理し、乱立する型式名の総称として「所謂亀ヶ岡式土器」という用語を用い、大洞貝塚および秋田県藤株遺跡出土資料の詳細な分析を通じて大洞 B・BC・C1・C2・A・A’式の細別型式を設定してその変遷を確定させた（山内 1930）。ここにおいて、大別型式の亀ヶ岡式は細別型式としての大洞諸型式に解体されることになるが、昭和 12 年の「縄紋土器型式の細別と大別」に掲載された編年表では、「陸奥」の晩期土器型式名として「亀ヶ岡式」の名称が登場する。編年表の註記から、「亀ヶ岡式」は未命名の４型式を総称する名称であったことが分かる（図 2-13）。

このように山内は、東北地方に展開する縄文時代晩期の大別土器型式名として「亀ヶ岡式」を採用しつつ、年代的変遷とともに地域性を有する土器型式を整理して、東北地方北半部に細別型式の「亀ヶ岡式」を設定し直そうとしたと理解される。この山内の研究方針は戦後に引き継がれ、『日本原始美術 1　縄文式土器』の付表「縄文土器型式の編年比較表」においても東北北部は型式未命名ながら、細別型式として「亀ヶ岡式」が使用される（山内 1964）。

縄紋土器型式の大別と細別

	渡島	陸奥	陸前	関東	信濃	東海	畿内	吉備	九州
早期	住吉	(+)	堀木 1 〃 2	三戸・田戸下 子母口・田戸上 茅山	曾根？× (+)	ひじ山 粕畑		黒島×	戦場ヶ谷×
前期	石川野× (+)	円筒土器 下層式 （4型式以上）	室浜 大木 1 〃 2a, b 〃 3—5 〃 6	蓮田式｛花積下 関山 黒浜 諸磯 a, b 十三坊台	(+) (+) (+) 踊場	鉾ノ木×	国府北白川 1 大歳山	磯ノ森 里木 1	轟？
中期	(+) (+)	円筒上 a 〃 b (+) (+)	大木 7a 〃 7b 〃 8a, b 〃 9, 10	五領台 阿玉台・勝坂 加曾利E 〃（新）	(+) (+) (+) (+)			里木 2	曾畑 阿高 出水｝？
後期	青柳町× (+) (+)	(+) (+) (+) (+)	(+) (+) (+) (+)	堀之内 加曾利B 〃 安行 1, 2	(+) (+) (+) (+)	西尾×	北白川 2 ×	津雲上層	御手洗 西平
晩期	(+)	亀ヶ岡式｛(+) (+) (+) (+)	大洞B 〃 B—C 〃 C1, 2 〃 A, A’	安行 2—3 〃 3	(+) (+) (+) 佐野×	吉胡× 〃 × 保美×	宮滝× 日下×竹ノ内× 宮滝×	津雲下層	御領

註記 1. この表は仮製のものであって，後日訂正増補する筈です。
2.（+）印は相当する式があるが型式の名が付いて居ないもの。
3.（×）印は型式名でなく，他地方の特定の型式と関聯する土器を出した遺跡名。

図 2-13　山内清男により組み立てられた縄文土器型式の編年表（山内 1937）

3.「亀ヶ岡文化」・「亀ヶ岡文化圏」の用語の成立と定着

縄文土器の分類・編年研究とともに、「亀ヶ岡式土器」の共伴遺物の内容やその地理的広がりが次第に明らかになるが、その考古学的文化を指し示す用語として「亀ヶ岡文化」・「亀ヶ岡文化圏」が用いられるようになる。こうした用語の原型となる表現は、昭和７年に『ドルメン』に掲載された山内清男「日本遠古之文化　四　縄文土器の終末二」に見られる（山内 1932）。亀ヶ岡式が東北地方で独自の発達を遂げたことを説明する際、山内は「亀ヶ岡式の文化圏」という表現を用いている。この論文

発表以降、「亀ヶ岡式文化」（甲野 1935）・「亀ヶ岡文化」（八幡 1936）という用語が複数の研究者間で用いられており、学術用語として定着していく過程を垣間見ることができる。戦後、山内・芹沢長介・坪井清足により「亀ヶ岡文化」・「亀ヶ岡文化圏」という用語が引き続き使用される（中村編 1996・芹沢 1960・坪井 1962）とともに、この用語が考古学者以外にも普及していく。古代史学者の藤間生大がその著書『日本民族の形成』で「亀ヶ岡式文化」・「亀ヶ岡式時代」という用語を使用していることや、第 9 節に述べる「風韻堂コレクション」を形成した佐藤公知が『西津軽郡史』掲載の該当箇所を抜粋して『亀ガ岡文化』という著書を刊行していることは用語普及の一端を示すものと考えられる（藤間 1951・佐藤 1956）。

4.「ミネルヴァ論争」と亀ヶ岡遺跡

土器編年大綱の確立と「亀ヶ岡式」の定着は、その実年代をめぐる新たな論争へと発展する。雑誌『ミネルヴァ』創刊号の座談会「日本石器時代文化の源流と下限を語る」（江上ほか 1936）での山内清男の発言に端を発する「ミネルヴァ論争」において、その一方の当事者であった喜田貞吉が縄文時代の終末年代を論じる根拠としたのが縄文土器と宋銭あるいは鉄製品との共伴関係である。青森県是川遺跡や岩手県大原町遺跡における報告が学史上有名だが、事例集成において、亀ヶ岡遺跡での縄文土器と鉄鏃との共伴関係に言及していることは注目される（喜田 1934）。この中で、喜田は亀ヶ岡遺跡の現地を熟知していること、また実物を調査した結果からもその共伴は確実であることを述べ、「ともかくこの亀ガ岡遺跡にいた石器時代人は、一方に金属文化の隣人を有し、その製品を入手していたのであった」と結論付けている。

喜田の論拠は、佐藤公知が雷電宮付近の斜面から多数の土器・石器などとともに掘り出した大型鉄鏃にあり、この出土状況についての同様の記述は佐藤公知の『西津軽郡史』にも認められる（佐藤 1954）。喜田と佐藤が、亀ヶ岡遺跡での縄文土器と鉄鏃との共伴について情報を共有しており、また石器時代の終末年代についても共通した理解を示していることは、両者の交流さらには喜田の幅広い人脈を物語る証拠といえる。

亀ヶ岡遺跡を含む複数の遺跡で縄文土器と宋銭あるいは鉄製品が共伴するとの喜田の上記の主張に対し、山内は亀ヶ岡式およびその類似土器の出土例を東北地方以外に広く求め、こうした土器と在地土器との共伴関係を確認していく。結論として山内は、亀ヶ岡式土器が関東・中部および近畿地方における縄文時代終末期の在地土器型式と交渉を有することから、縄文時代の終末年代は九州から東北地方までの地域で大差がないと主張し、東北地方における縄文時代の終末を平安・鎌倉時代まで引き下げる喜田の考えを論駁する（山内 1936）。その後も両者の論争は平行線をたどるが、「ミネルヴァ論争」において山内の主張する考古学の「組織的研究」は、「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄文式土器の終末」（山内 1930）等にその実践が示されており、「亀ヶ岡式」・「亀ヶ岡文化」をめぐる地域内の編年研究および地域間比較に基礎をおいた論争であったと評価できる。

第 7 節　泥炭文化層解明を目的とした慶應義塾大学の発掘調査

昭和 24 年秋、慶應義塾大学文学部の間崎万里（西洋史）が、北海道での講演旅行の帰途に偶然の機会から青森市在住の医師・成田彦栄が蒐集した考古資料を見学することとなった。成田彦栄は亀ヶ岡遺跡が乱掘によって壊滅寸前の状況にある事態を憂慮しており、越後谷源吾所有の苗代が一部未発掘のまま残存している点、および越後谷源吾は大山柏の調査を希望しているが、いつ破壊の手が伸びるかも分からず、学術調査が急務である点を間崎に説いた。

間崎は東京到着後、直ちに同大学の松本信広、藤田亮策、清水潤三に成田から聞いた話を伝え、発掘調査の実施を勧めた。松本らも亀ヶ岡遺跡の重要性に関心を懐いていたのみならず、先年に調査を

実施した千葉県南房総市の加茂遺跡で検出された泥炭文化層との比較研究を行う機会ともなることから、慶應義塾大学文学部考古学研究室による発掘調査の実施計画が起こった。

松本らは文部省に正規の調査手続きを取り、史跡指定地内の発掘に関する特別の許可を得る。他方で大山柏にも事情を述べ、調査の快諾を得て、藤田を主査とする調査班が編成されることとなる。

昭和 25 年５月になると、成田彦栄および五所川原考古学会長・奥田順蔵によって行われていた現地側との交渉も進みつつあった。そのため、藤田と清水が予備調査の目的で亀ヶ岡遺跡に赴き、地主の越後谷源吾から正式に所有地内での発掘調査実施の承諾を得るとともに、館岡村村長の蛯名久造に調査への援助を依頼した。さらに、青森県教育委員会の支援も得られることとなり、昭和 25 年８月に発掘調査が実施された（図 2-14）。

調査にあたっては慶應義塾大学以外にも多くの人々が参加しており、県内からは青森市立第一高等学校（現・青森県立青森北高等学校）教諭の小野忠明が有志の生徒とともに作業に参加し、五所川原考古学会の葛西国四郎、木村新左衛門、松平義人も援助に加わった。また、館岡村に在住し、亀ヶ岡遺跡を中心とした郷土史の研究に長年にわたり携わった佐藤公知も調査を援助している。

なお調査終了後、同年８月 12 日に館岡中学校において出土品の展覧会が実施され、藤田亮策が調査成果について報告している。８月 17 日には青森県教育委員会の後援で、青森市立浦町小学校においても出土品の展覧会を開催しており、藤田と松本信広が講演を行っている。12 月２日には慶應義塾大学で報告会を実施し、学会に成果の公表がなされた。出土遺物は調査終了後、慶應義塾大学文学部考古学研究室に送られ、昭和 26 年６月に整理作業がすべて終了した。そして昭和 31 年８月に清水潤三らが補足調査を実施し、昭和 34 年６月に報告書が刊行されるに至った。

図 2-14　昭和 25 年に慶應義塾大学考古学研究室から成田彦栄に贈られた『亀ヶ岡遺跡発掘記念』アルバム（成田惠子氏提供）　上：沢根調査地点、下：地層の状態を注視する藤田亮策

調査結果の概要は第４章第２節で記載するが、慶應義塾大学の調査成果の要点は、①佐藤傳蔵による調査との層序対比をおこないつつ、沢根低湿地における遺物包含層は泥炭層上の粘土層に限られること、近江野沢低湿地における遺物包含層は泥炭層中にあることを明らかにしたこと、②低湿地における遺跡形成要因を廃棄行為に求め、「捨て場」としての解釈を示したこと、の２点にある。②について報告書では、泥炭層あるいは粘土層中には完形土器や石器とともに獣骨・貝殻・植物種子等が混入することから、低湿地の遺物包含層は遺跡に居住した石器時代人の不要物投棄の結果生じたものと結論付けている。その一方で、沢根低湿地の複数地点で確認された完形土器の密集した出土状況や、密集して出土する完形土器が小型精製土器

や漆塗り土器であることを根拠として、何らかの祭祀行為を想定している。

なお、報告書の巻末写真図版には、発掘調査出土資料とともに、地元住民が所有している各種の遺物も掲載された。その一部は現在慶應義塾大学や明治大学博物館に所蔵され、その他一部資料はつがる市木造亀ヶ岡考古資料室に展示されている。

第8節　低湿地における古環境調査

亀ヶ岡遺跡の泥炭層遺跡あるいは低湿地遺跡としての評価は、人工遺物のみならず自然遺物にも研究者の目を向けさせ、複数研究機関により低湿地を対象とした学術的な発掘調査やボーリング調査が実施された。これらの調査では、花粉分析や年代測定等自然科学の手法が導入され、古環境復元を目的とした学際研究も実施された。

1. 慶應義塾大学の調査

花粉分析の実施は、昭和 25 年の慶應義塾大学の調査にまでさかのぼる。A・B トレンチで、遺物包含層である粘土層下の泥炭層中で花粉が検出され、トチノキが卓越する層準とハンノキが卓越する層準が確認された（堀 1959）。泥炭層堆積当時は現在と同様かやや寒冷な気候と推定された。

2. 青森県教育委員会の調査

昭和 48 年に実施された青森県教育委員会によるバイパス地点の発掘調査でも第Ⅱ～Ⅴ層で泥炭層が確認され、各層に対して花粉分析が実施された（新渡戸 1974）。第Ⅴ～Ⅳ層下底期で初期のハンノキ繁栄と中期頃からのトチ増加、第Ⅳ層期でハンノキの急激な減少とトチの繁栄、第Ⅲ層期でトチの減少とクルミ科の増加、第Ⅱ層期で再びトチの急激な増加が確認された。このことから、第Ⅴ層期から第Ⅳ層期にかけての急激な乾地化、第Ⅲ層期の湿地化、第Ⅱ層期の再度の乾地化という環境変遷が捉えられた。以上の経過をまとめ、全時期を通じて植相は二次林的であり、トチ・ハンノキ・ナラ等を主体とした落葉広葉樹林であること、丘陵下の湿原における水域の拡大・縮小による樹種の明瞭な消長が認められると結論付けた。

3. 文部省科学研究費特定研究「古文化財」研究班の古環境調査

昭和 51～53 年および昭和 56～57 年、文部省科学研究費特定研究「自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究（略称「古文化財」）」に参加した市原壽文ほかの研究班は、縄文後・晩期の低湿性遺跡に関する研究を目的として、近江野沢・沢根・津軽平野の南北 600m、東西 3.2kmの範囲で計 45 地点においてボーリング調査を実施し、土層柱状図の作成および放射性炭素年代測定をおこなった（市原ほか 1980、巻末資料 6）。土層柱状図の対比の結果、縄文時代前期末～中期初頭頃には、古岩木川・古山田川などの運搬した砂層が沢根・近江野沢の谷口を閉鎖し、両低湿地はその後引き続き泥炭層の堆積が進行し、最後には亀山丘陵東方の埋没砂層上の泥炭と連続するに至ったと判断された。そして、縄文時代晩期前半頃、沢根・近江野沢の埋没凹地は深い沼地であり、亀山丘陵東方には埋没砂層上の浅い沼地が展開する景観を復元している。

H27 地点（沢根低湿地の奥部）の花粉分析からは、縄文時代晩期の層準で林縁や荒地に多く見られる植物の花粉やアカマツの花粉が急増し、さらにトチノキが激減する一方でクリが増加するとする結果が得られた（那須・山内 1980、巻末資料 7）。

4. 青森県立郷土館調査地点の学際研究

さらに市原ほかの研究班は、青森県立郷土館と共同して学際研究を実施し、沢根 B・C トレンチの

泥炭の放射性炭素年代測定、砂層の粒径組成分析、動物遺存体・昆虫遺体・木材・種子・花粉・珪藻分析をおこなった（市原ほか 1984、巻末資料 8）。分析結果を総合すると、大洞 B 式期になると丘陵部の植性は破壊が進み、二次林や林縁の植物が急増する。あわせて、砂層が沢根・近江野沢の谷口を閉鎖して形成された沼地は、浅く湿地化して水質が富栄養化し、居住生活の影響を示す糞食～屍食性昆虫も増加する。この結果、湿地性植物による泥炭形成が阻害されて黒色有機質粘土が堆積するようになると理解された。

昭和 55～57 年の青森県立郷土館による沢根 A・B・D 区の調査では、山形大学の山野井徹ほかにより花粉分析が実施され、B-2 区の良好なデータから沢根地区の環境変遷が復元された（山野井・佐藤 1984）。B-2 区の花粉等の組成はその特徴により A 帯から E 帯に区分され、放射性炭素年代測定結果から、C 帯の形成年代が縄文時代晩期に相当する。C 帯に菌類の胞子が多産する傾向が認められることから、晩期に入ると沢根低湿地が徐々に乾地化すると推定された。花粉組成によれば、C 帯におけるマツ・スギ・クルミ・クリ・トチノキの産出率が下帯より増加しており、特にトチノキが高率化する。さらに、草本類の花粉が多産し、ソバの花粉の産出も認められた。以上のことから、縄文時代晩期に入ると、人為的に植生が著しく改変されるようになったと理解された。

5. 弘前大学の古環境調査

平成 23 年には、弘前大学北日本考古学研究センターによるボーリング調査が実施された（上條編 2014）。調査地点は近江野沢地区 5 地点、沢根地区 10 地点を含む計 19 地点である。上記「古文化財」研究班の調査をふまえ、ボーリング未実施地点や詳細データが必要な地点について、土層柱状図作成、放射性炭素年代測定、植物珪酸体分析、花粉分析、種実類同定、出土木材の樹種同定が実施された。その結果、沢根低湿地の形成過程については、「古文化財」研究班により確認されていた沢出口の閉鎖現象を再確認したほか、沢の奥や台地脇では砂層の堆積がより高い位置で確認でき、この砂層の堆積により谷部が埋め立てられて緩斜面を形成し、台地と低湿地との移動が容易になる場を形成したと理解された。

植生の変遷について、沢根地区では沼地の湿地化に伴い大洞 BC～C2 式期に植物堆積層が形成されてトチノキが増加すること、近江野沢地区では大洞 C1 式期の遺物包含層である粘土層形成期に入ると、ブナ属・トチノキ・コナラ属コナラ亜属・クリが分布するようになり、粘土層の形成が終わると上記の森林が縮小し、イネ科の草地が拡大することが確認された。

上記の各研究機関により実施された低湿地の古環境調査を総括すれば、縄文時代晩期に入るとトチノキやクリが増加し、低地が乾地化するといった環境変遷が認められる。そしてその主な原因は、丘陵地を活動の場とした人々の行動範囲が湿地にも及び、水産資源獲得を含めた多様な生産活動の場として利用されたためと考えられている。

第9節　国内外の亀ヶ岡コレクション

亀ヶ岡遺跡が江戸時代より知られた原因は、その出土品の素晴らしさにある。台地上の亀山地区では現在の雷電宮付近（つがる市木造亀ケ岡亀山 92 付近）の松の根部分より土器が鈴なりに出るなどの菅江真澄による記載がある（菅江 1798a）。このように比較的浅いところから遺物が出土し、発掘調査の結果もこれを裏付けるように、史跡指定地及びその周辺では地表面下 20～30 ㎝のところで縄文時代晩期の遺物包含層に達している（つがる市教育委員会 2009 ほか）。そのため遺跡地で生活する人々は、家を建てる際や耕作時に表面採集等により容易に遺物を手にすることができたと考えられる。

亀ヶ岡遺跡の出土遺物は、国内外の多数の機関が所蔵しており、国内では県内 3 機関、県外 15 機

関、国外では可能性ある資料を含めれば７機関に収蔵が確認されている（表 2-2）。この他、地元住民が所有する多数の遺物がつがる市木造亀ヶ岡考古資料室に寄託されている。

過去に亀ヶ岡遺跡を調査した若林勝邦・佐藤傳蔵・小岩井兼輝・吉田格等はいずれも大学に所属する研究者であり、その発掘調査資料は現在各大学に所蔵されている（磯前・赤澤 1996、藤沼ほか 2006b・立正大学文学部考古学研究室 1990）。一方で、蓑虫山人の発掘調査資料は結果的に散逸し、その一部資料は蓑虫が晩年に寄寓した名古屋市東区矢田町の長母寺（ちょうぼじ）に所蔵され、また他の一部は上述のように神田孝平に贈呈され、その後大阪毎日新聞社社長を務めた本山彦一のコレクションに入り、現在は関西大学博物館に所蔵される（関西大学博物館 1998）。

発掘調査資料以外の各コレクションは、その形成の経緯から①地元研究者の収集資料が母体となるもの、②地元住民の収集資料が母体となるものに大きく２分される。①には佐藤公知・大高興父子の形成した「風韻堂コレクション」（青森県立郷土館所蔵）、佐藤蔀の所蔵資料を母体とする「久原房之助コレクション」（東北大学所蔵）と「成田彦栄コレクション」（弘前大学所蔵）など、②には東京国立博物館所蔵資料、明治大学所蔵資料、野口義麿コレクション（國學院大學博物館所蔵）、八王子市郷土資料館所蔵資料などが該当する。

1. 佐藤蔀蒐集資料を引き継いだ久原コレクションと成田コレクション

佐藤蔀（1852～1944）は弘前藩士の家に生まれ、絵画と国学を平田魯仙（1808～1880）（前掲）の下で学んだ。佐藤は教職のほか、青森県の農林分野や農林省営林局に勤めた。その画才を生かして亀ヶ岡遺跡などの出土遺物のスケッチを行っており、これらの図譜は今日の考古学の観点からも高度な実測図としての価値を有している。

佐藤が若き頃に収集した資料は実業家・政治家の久原房之助が購入した。その後、大正 15（1926）年に東北帝国大学に奥羽史料調査部が設置されたことを契機に喜田貞吉による東北地方の考古資料蒐集が始まり、久原コレクションの重要性に着目した喜田が久原家に依頼し、昭和４（1929）年に東北帝国大学に寄託された（喜田 1933・東北大学文学部 1982・須藤編 2007）。

佐藤が晩年収集した考古遺物や美術品などの多くの資料は成田彦栄（1898～1959）が引き継ぎ、成田自身収集にかかる考古資料やアイヌ文化関係資料と共に、平成 21（2009）年に遺族から寄贈を受け、弘前大学亀ヶ岡文化研究センター（現　北日本考古学研究センター）に収蔵された（関根ほか 2010）。

2. 青森県立郷土館の風韻堂コレクション

青森県立郷土館所蔵の「風韻堂コレクション」は、大高 興（1926～2006）により寄贈された、県内外出土品の計 11,579 点に及ぶ考古資料群である（青森県立郷土館 1973・1996）。コレクションには、亀ヶ岡遺跡から出土した縄文時代晩期の土器・土偶・土製品・石器・勾玉等が多数含まれており、このうち 60 点が、昭和 52（1977）年７月 21 日に青森県重宝（考古資料）に指定されている（指定名称「亀ヶ岡遺跡出土品（風韻堂）」）。コレクションの礎を築いたのは、大高の父・佐藤公知（1899～1967）である（図 2-15）。西津軽地域 10 校の小学校長を歴任した佐藤は郷土史家でもあり、『西津軽郡史』（1954）や『亀ガ岡文化』（1956）の編著者として知られている。『亀ガ岡文化』では、自ら描いた絵図面を用いて出土品を紹介し、詳

図 2-15　「風韻堂コレクション」の礎を築いた佐藤公知（佐藤 1956）

細な解説を加えるとともに、亀ヶ岡遺跡の研究史や遺跡の現状を記している。絵図面には自身の所蔵品のみならず、他の館岡住民さらには青森市の成田彦栄の所蔵品も含まれており、佐藤が意識的に多くの考古資料を観察・図化していたことが窺われる（図 2-16）。佐藤は同書に、本書は遺跡の保存を期す目的もあることを述べており、昭和 19 年（1944）年に「亀ヶ岡石器時代遺跡」として国の史跡に指定された経緯などについても記している。

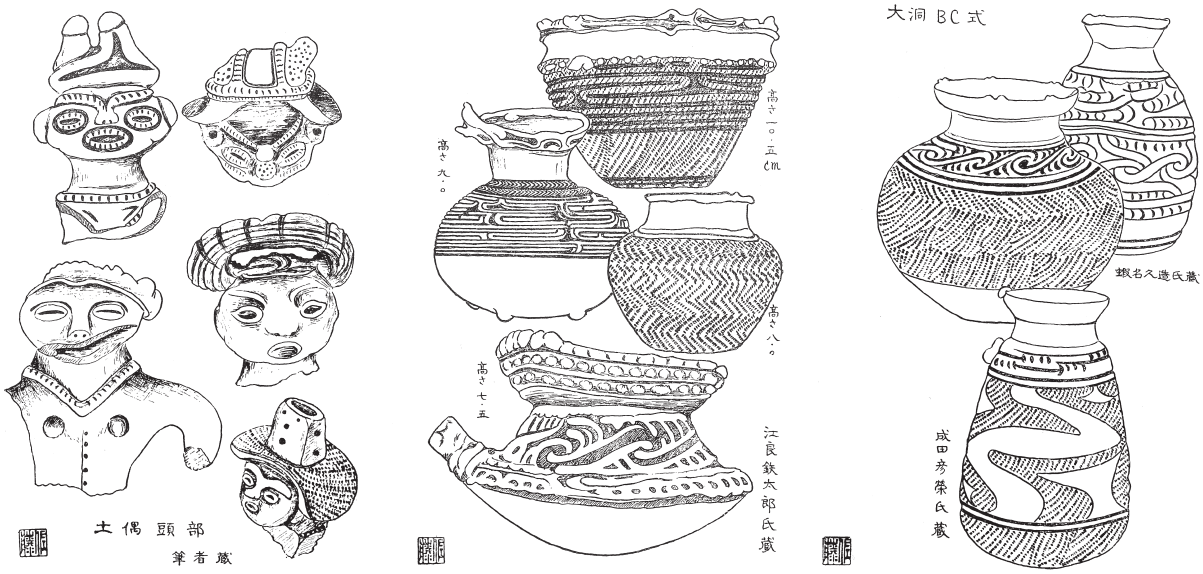


図 2-16　佐藤公知の描いた亀ヶ岡遺跡出土遺物（佐藤 1954）

3. つがる市木造亀ヶ岡考古資料室の寄託資料

つがる市木造亀ヶ岡考古資料室は、亀ヶ岡遺跡から直線距離で約 1 ㎞南西の館岡集落西部に所在する。昭和 55（1980）年に旧木造町農業者トレーニングセンター「縄文館」内の一室に開設された。

亀ヶ岡考古資料室の前身となる展示施設に「亀ヶ岡考古館」がある。亀ヶ岡考古館は、昭和 34（1959）年 3 月に県内初の史跡に関わる展示・収蔵施設として開館した。亀ヶ岡遺跡の史跡範囲の南端から道なりに南へ約 200mの位置、旧木造町役場館岡出張所に併設されたが、施設老朽化と湿気のため閉館を余儀なくされ、その代替施設として現在の木造亀ヶ岡考古資料室が設置された。

展示品は、地元の人々から寄託ないしは寄贈を受けた出土品である（巻頭写真 6 下、図 2-17・2-18）。耕作などの際に出土したものであり、亀ヶ岡遺跡出土品のほか隣接する田小屋野貝塚からの出土品も少量含まれている。「亀ヶ岡考古館」から「木造亀ヶ岡考古資料室」へ遺物を移す際、弘前大学教育学部の村越潔教授による土器型式判定などが行われている。

亀ヶ岡遺跡出土品の多くは、亀ヶ岡遺跡の南北を構成する低湿地から出土したものが多く、ついで台地上の亀山地区と、史跡西側隣接地からのものと推定される。

4. 海外コレクションの概要

亀ヶ岡遺跡出土品のすばらしさは江戸時代から国内外の注目を集め、早い時期から海外にも流出した。中谷治宇二郎は『津軽古今雑話』中の記事として、江戸時代に亀ヶ岡出土品が堺港から舶載されてオランダに輸出されたことを紹介している（中谷1929a）。現在確認できる範囲では、メトロポリタン美術館・大英博物館・パリのギメ東洋美術館・ストックホルム東洋美術館などの機関で亀ヶ岡遺

跡出土品あるいは亀ヶ岡式土器等を所蔵している。

明治期に青森県や北海道などで布教活動を行なったフォリー神父が蒐集した亀ヶ岡遺跡出土土器がギメ東洋美術館へ所蔵された経緯と所蔵資料の内容については詳細な報告があり、所蔵されている土器のうち12点には底部に「Kamegaoka」の墨書があることも確認されている（鈴木2013）。亀ヶ岡遺跡に代表される日本の考古資料の海外流出は、万国博覧会の隆盛という19世紀末のヨーロッパの潮流が背景にあり、同時代の海外では亀ヶ岡式土器がすでに蒐集の対象であったことが鈴木により指摘されている。当時のヨーロッパにおける日本文化の紹介に亀ヶ岡遺跡が大きな役割を果たしていたことが分かる。

表 2-2　国内外の亀ヶ岡コレクション所蔵機関一覧

所　蔵　機　関	内　　容	文　　献
弘前大学人文社会学部付属北日本考古学研究センター	・成田彦栄コレクション(一部旧蔵は佐藤蔀：亀ヶ岡遺跡出土土器・石器のほか、佐藤蔀による「画譜」や成田彦栄の調査資料など) ・昭和9（1934）年の小岩井兼輝の発掘調査資料（土器ほか）ほか	関根ほか2010 藤沼ほか2006b
弘前市立博物館	土器など	
青森県立郷土館	・佐藤公知・大高興父子収集の「風韻堂コレクション」（亀ヶ岡遺跡出土品60点は青森県重宝） ・昭和55年から57年の3次にわたる発掘調査資料 （一部、つがる市縄文住居展示資料館・木造亀ヶ岡考古資料室に貸出展示）	大高1969 青森県立郷土館1973 市川・鈴木1984
つがる市教育委員会	・昭和48年の主要地方道鰺ヶ沢蟹田線改良に伴う発掘調査資料（晩期を中心とする縄文前期末葉から弥生時代にかけての資料）	村越ほか1974
東北大学総合学術博物館	久原房之助コレクション（佐藤蔀旧蔵品）が母体	東北大学文学部1982
慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室	昭和25年の三田史学会による発掘調査資料（土器・土偶・石器・骨角器・漆製品・獣骨・木製品など）	三田史学会1959
明治大学博物館	購入資料（土器・遮光器土偶等）	明治大学考古学博物館1991
東京国立博物館	・購入資料（土器・土偶・土面・石器・骨角器・玉類など） ・重要文化財2点（遮光器土偶・土面）・重要美術品1点（土製品）所蔵 ・平成館常設展示のほか、九州国立博物館などに貸出列品	東京国立博物館1996・2003ほか
東京大学総合研究博物館	・若林勝邦・佐藤傳蔵発掘調査資料ほか（土器・土偶等）	磯前・赤澤1996ほか
國學院大學博物館	野口義麿コレクション（土器・石器・玉類・漆製品・貝など）	國學院大學考古學資料館研究室1983
国立歴史民俗博物館	・田中忠三郎コレクション（土器・漆塗り土器など）ほか ・漆液容器1点に同封された書き付け「雷電神社ノ南苗代ヨリ発見」、他は出土地点情報なし	国立歴史民俗博物館2015
奈良文化財研究所	山内清男コレクション	
関西大学博物館	・大阪毎日新聞社社長だった本山彦一（松蔭）の「本山彦一コレクション」 ・蓑虫山人から神田孝平にわたったとされる資料	関西大学博物館1998 青森県立郷土館2008
函館市北方民族資料館	北海道大学名誉教授児玉作左衛門寄贈の「児玉コレクション」（土器・土偶など）	市立函館博物館1983
八王子市郷土資料館	井上郷太郎コレクション（購入資料、土器・土偶・石器・骨格器など）	井上1962 八王子市郷土資料館2005
目黒区めぐろ歴史資料館	内藤確介コレクション（土器ほか）	
立正大学博物館	吉田格コレクション（土偶頭部・土器など）	立正大学文学部考古学研究室1990
辰馬考古資料館	旧工藤祐龍コレクション（土偶・完形土器・独鈷石など）	辰馬考古資料館2002
京都大学総合博物館	須藤求馬・江見忠功（水蔭）コレクション（土器等）	京都大学文学部1960
大英博物館（イギリス）	村越潔氏による	
スコットランド国立博物館（イギリス）	「Mutsu」と注記された遺物、村越潔氏による	
ルーブル美術館（フランス）	村越潔氏による	
人類博物館（フランス）	「Mutsu」と注記された遺物、村越潔氏による	
ギメ東洋美術館（フランス）	「kamegaoka」と注記された土器など、ウルバン・フォリー神父収集品	鈴木希帆2013
ストックホルム東洋美術館（スウェーデン）	スウェーデン皇太子に大正15年に贈られた土器（紀州徳川侯爵コレクション、出土地不明）	鈴木希帆2015
メトロポリタン美術館（アメリカ）	村越潔氏による	

図 2-17　亀ヶ岡遺跡出土土偶（つがる市木造亀ヶ岡考古資料室寄託資料　個人蔵）

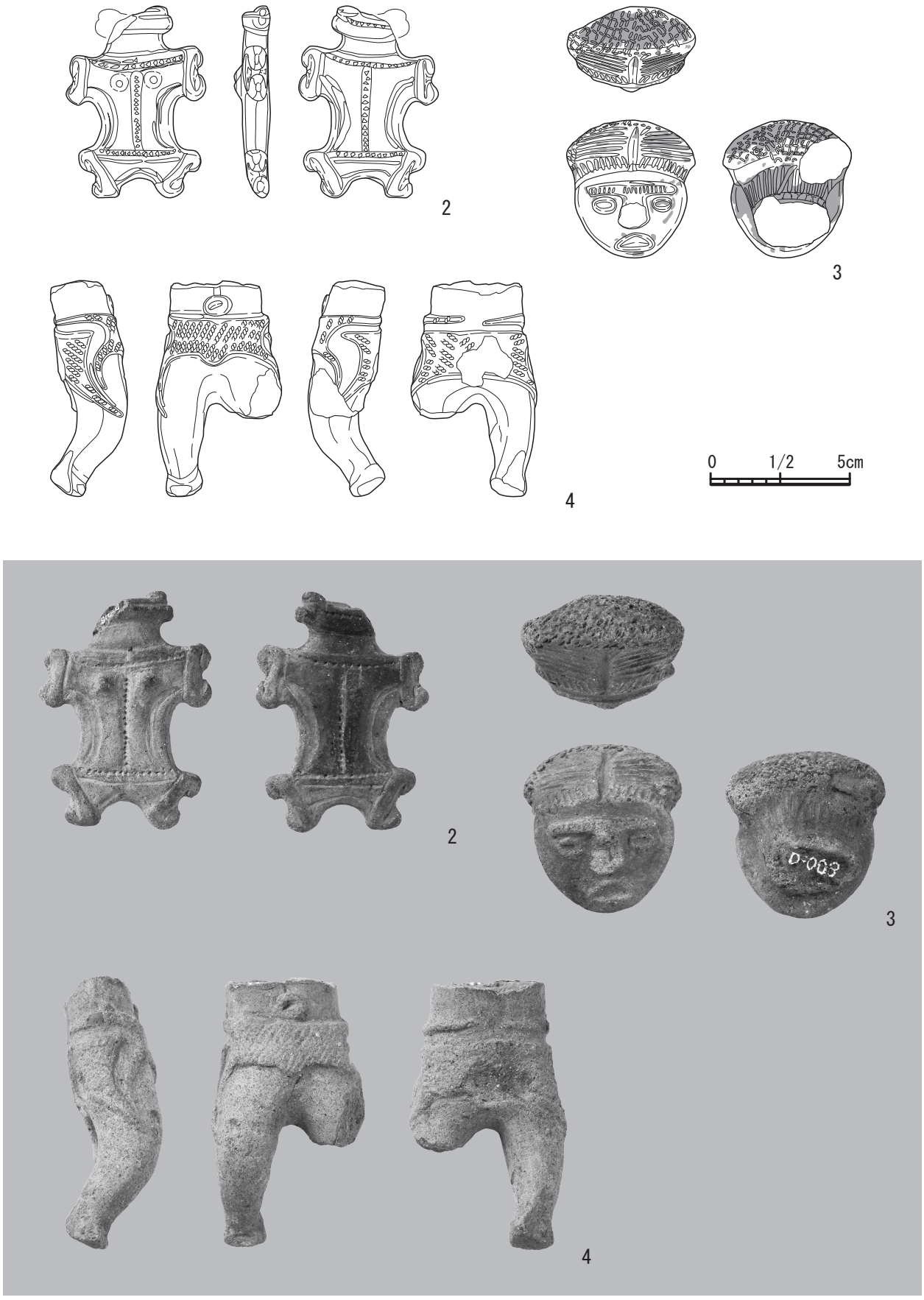


図 2-18　亀ヶ岡遺跡出土土偶（つがる市木造亀ヶ岡考古資料室寄託資料　個人蔵）

第10節　東京国立博物館所蔵遮光器土偶解説

品川　欣也（東京国立博物館）

教科書にも掲載されることで著名な青森県つがる市亀ヶ岡遺跡出土の遮光器土偶は、1990(平成 2)年 10 月 11 日に文化庁からの管理替によって東京国立博物館所蔵(収蔵品番号 J-38392)となった。日本の縄文時代の土偶を代表する本例は 1887(明治 20)年に神田孝平(淡崖 1887)によってはじめて学界に紹介され、『東京人類学会雑誌』に収録された図解は神田との交流のあった佐藤蔀の作図(図 2-19)によるものである。1956(昭和 31)年 5 月 14 日に青森県指定(県重宝)、翌 1957 年 2 月 19 日に重要文化財指定された。当初は個人所蔵であったが、後に買い上げによって国保有となった。

本例は大形で中空の立像土偶で、体を正対すると顔がやや左側を向く(図 2-20)。遺存状況は右目上半から鼻、両腕の一部、左脚を欠損しているが、現況は右目が復元され、左脚が破断面を整えたかたちで修復がなされている。頭頂部を中心に彩色が残り、製作当初は全身が赤く塗られていたことが推測される。

体は足先が伏せた皿状をなし、脚部が内湾して立ち上がる。胴部は強く外湾して立ちあがり、突起状の手を施した腕を付して肩を形作る。頸部は内傾して立ち上がり、頭部は内折して上部が開口し、冠状の装飾を付す。基本は輪積みで体が成形され、脚部と胴部、胴部と肩部、肩部と頸部、頸部と頭部などの部位界は相対的に厚く仕上げられ、明瞭に指頭圧痕が残されている(図 2-21)。

遮光器土偶の装飾は大きく頭頂部、頭部、頸部、胴部、腕部、脚部に分けられるが、腕部と脚部は一貫して無文とする場合が多い。本例は頭頂部に橋状把手を十字に渡し、多数の突起で飾る。頭部のうち顔面部は全体を覆うように粘土を貼り付けて名前の由来となった大きな目を形作り、沈線で輪郭を丸く縁取り横に一条の沈線を施して目を表現する。突起で左右の耳と顎を、穿孔で口を表す。両側頭部には地文縄文に渦巻文を施し、後頭部には地文縄文に蛇行文ないし鋸歯文を垂下させる。頸部は無文。胴部は上下二帯に分帯され、磨消縄文手法によって点対象に主・副・補助文様が配置された雲形文を描く。性表現は粘土を貼り付けて小さな乳房が表現され、周囲を二条沈線間に刻目文を施して縁取る。また下腹部には三角孔、股下には円孔を設けて性器を表す。頸や胸にめぐる刺突文や突起を施した隆帯は頸飾りないし胸飾りを表したと考えられ、髪形や竪櫛などと考えられている頭頂部の装飾とともに、古くから考古学では当時に風俗を考える手立てとしてきた。

遮光器土偶の変遷については先学による研究(野口 1960、藤沼 1997、金子 2001 など)の蓄積がある。参照するならば、本例は大洞Ｃ1 式古段階に位置付けられる。頸部装飾帯の無文化、胴部装飾帯の上下二帯化が明瞭となるのは大洞Ｃ1 式期以降であり、遮光器土偶の大きな目の加飾が最も顕著になる時期でもある。また頭頂部の橋状把手が残ることから大洞Ｃ1 式古段階と判断でき、同段階に位置付けられる岩手県久慈市二子貝塚出土例に後出すると言えよう。

参考文献

金子昭彦 2001『遮光器土偶と縄文社会』ものが語る歴史シリーズ④、同成社
関根達人編 2009『佐藤蔀　考古図譜　Ｉ』弘前大学人文学部附属亀ヶ岡文化研究センター
淡崖(神田孝平)1887「瓶ヶ岡土偶圖解」『東京人類学会雑誌』第 3 巻第 22 号、東京人類学会
野口義麿 1960「いわゆる「遮光器土偶」の変遷」『ＭＵＳＥＵＭ』第 109 号、東京国立博物館
藤沼邦彦 1997『歴史発掘（3）　縄文の土偶』講談社

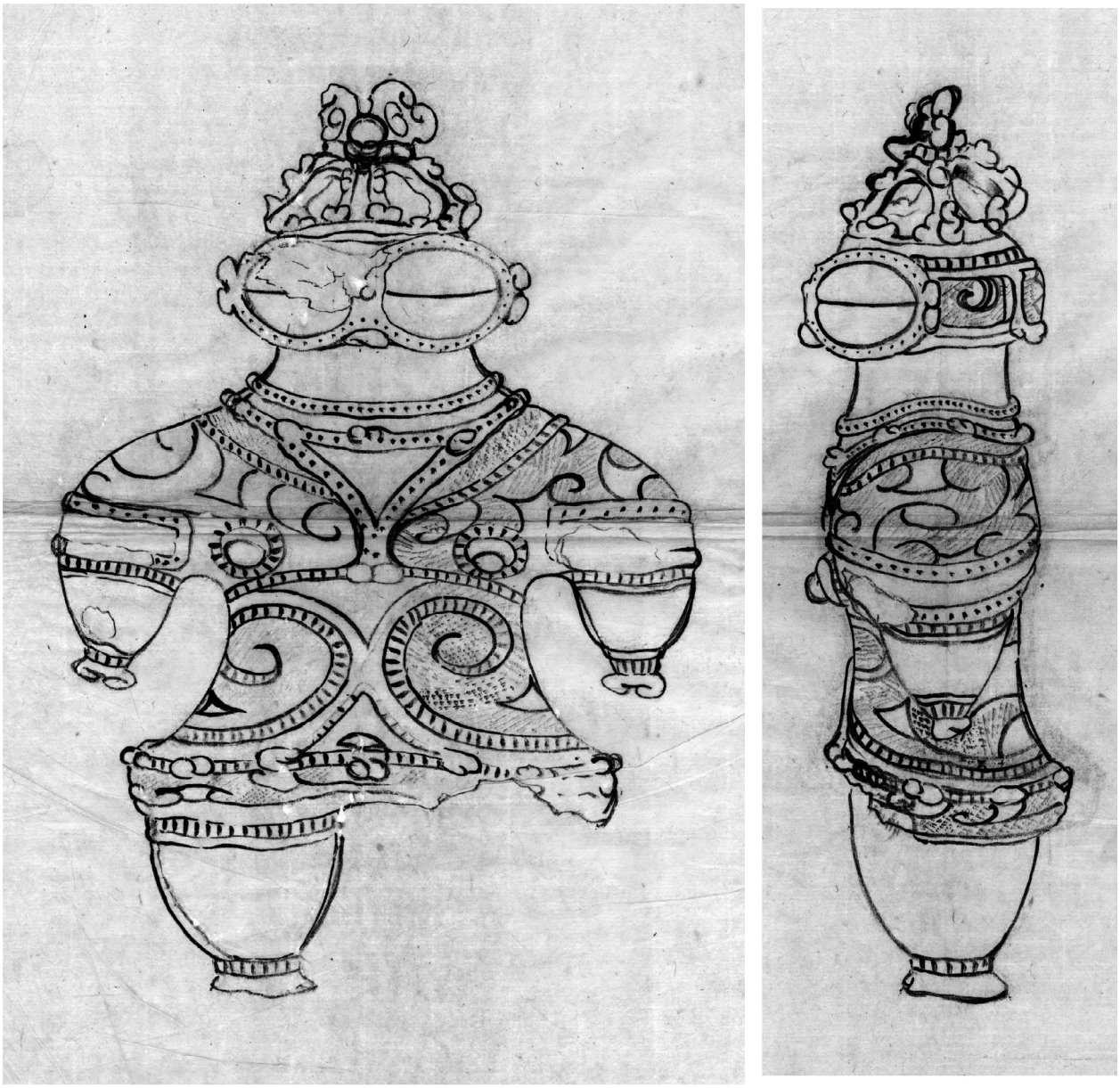


図 2-19　佐藤蔀が描く遮光器土偶（関根編 2009、
弘前大学人文社会科学部北日本考古学研究センター提供）

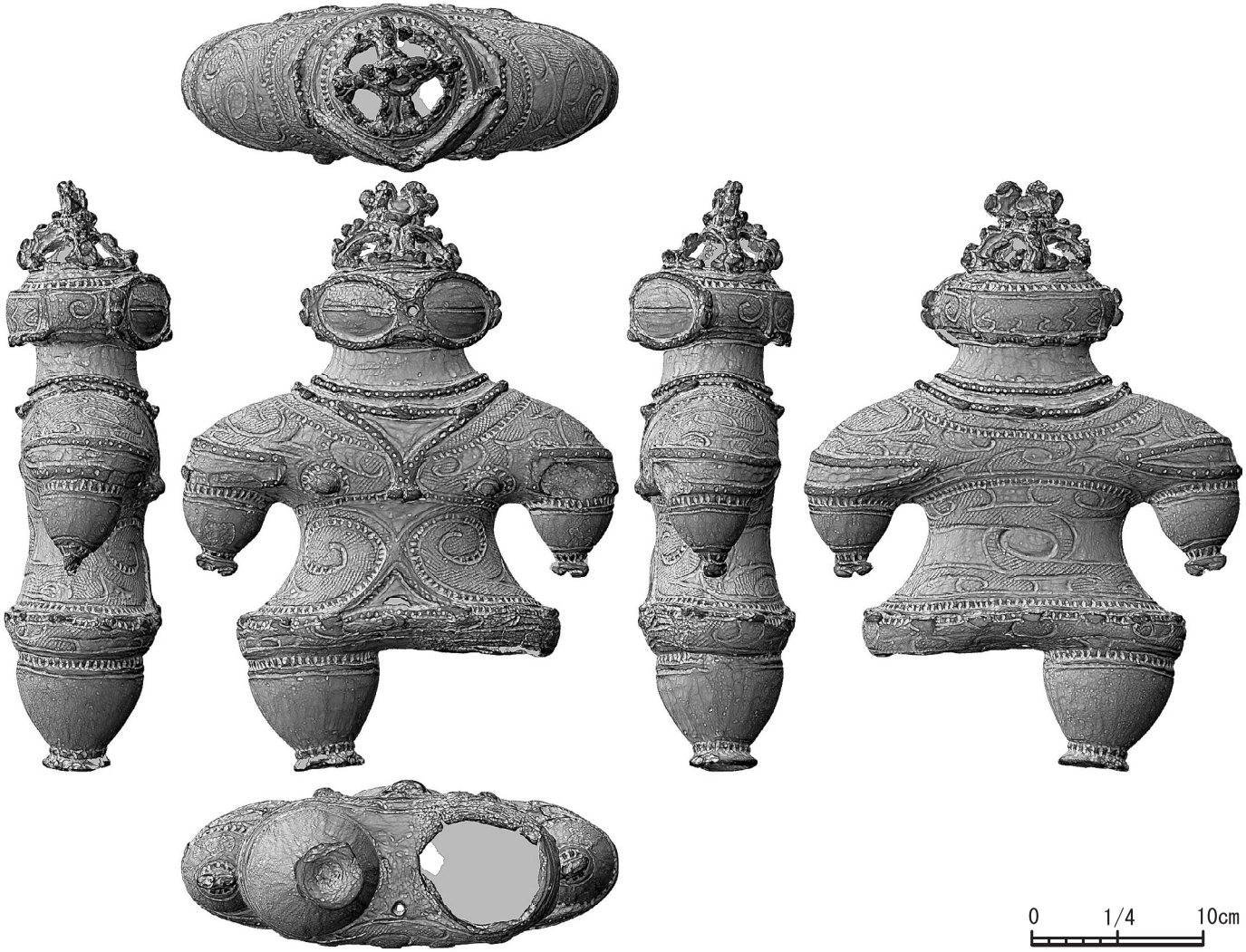


図 2-20 三次元計測データによる遮光器土偶の展開図（PEAKIT） ©TNM+LANG CO.,LTD　画像提供 東京国立博物館

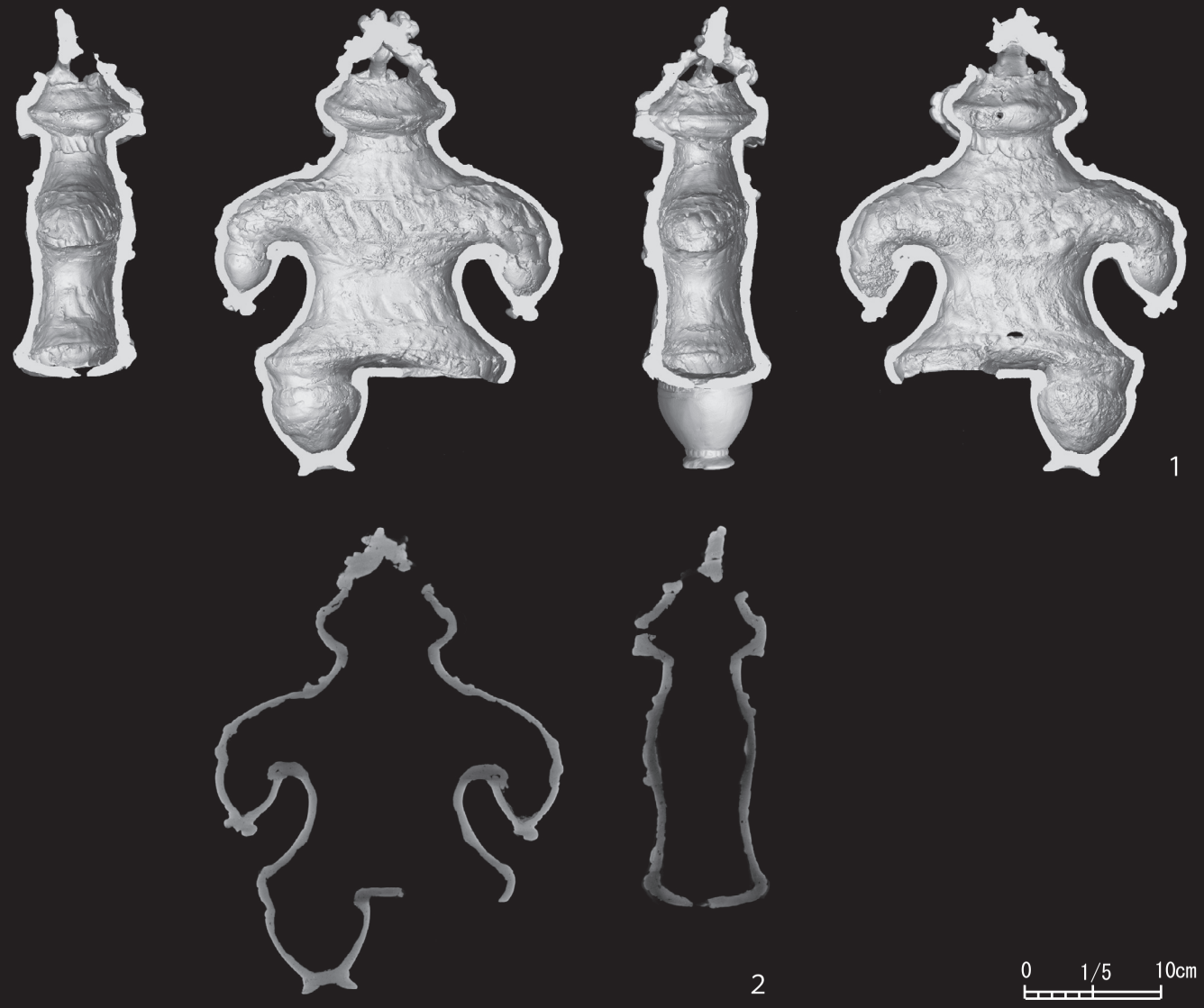


図 2-21　X線CTデータによる遮光器土偶の見通し断面画像（1）と断面画像（2）　画像提供 東京国立博物館

第3章　史跡指定に至る経緯と遺跡保護への取り組み

第1節　遺跡の乱掘から史跡指定へ

第２章で触れたように、「亀ヶ岡」の名は出土遺物と共に江戸時代から世に知られていた。明治以降は断続的に発掘調査が行われ、遺跡の性格が明らかとなりつつあった一方、遺物の売買を目的として盗掘も進んだようである（甲野 1953、佐藤 1956・史料３）。このような状況を受け、遺跡の所在地の西津軽郡舘岡村〔当時〕は昭和９（1934）年８月 31 日付で史蹟名勝天然紀念物保存法により、史料１のように史跡指定申請書を文部大臣あてに提出した。青森県は進達文書を加えている。同年中に仮指定が行われたとされる（佐藤 1956・史料３）が、官報・県報や公文書の記載からは仮指定の詳細は定かではない。同時期には浪岡城跡、七戸城跡、根城跡といった青森県内の南朝関係の史跡の指定が行われているが、青森市の伝北畠氏墓所は昭和 15（1940）年に仮指定を受けている（尾谷 2018）。当時の仮指定については「史蹟名勝天然記念物は、主務大臣がこれを指定した。ただし緊急を要する場合は、地方長官は、仮指定の措置をとることができた。両者とも官報告示によって発効した（中略）。仮指定については、大正十一年六月二十二日の依命通牒により、事前にあらかじめ本省に打合すべきことを指示しているが、これは仮指定も、制限を強いる力は、本指定と同様であるから、軽々となすべきものではなく、判断も国の価値判断と同じでなければならず、評価の基準が地方的に区々となるのをおそれたためであろう」（文化財保護委員会編 1960）とされ、正式の指定前に府道県が取るべき緊急的措置でありつつ、国との間で事前の連絡調整を求めていた。

第２章で触れたように、是川遺跡（八戸市）についても縄文晩期の低湿地遺跡として昭和戦前期に既に知られていた。「是川遺跡仮指定全図」（是川学習館展示品）には、「全図所有者泉山斐次郎　文部省から上田三平博士出張　是川村役場書記晴山善太郎作図」と書かれており、昭和８年に行われるべき仮指定のために準備されたとされる（工藤竹久氏ご教示）。上田三平は昭和２年から文部省の属官を勤めており、戦中に郷里の若狭に隠退するまで、唯一の文化財担当の高等官の黒板昌夫の下で全国の遺跡・史跡の現地調査を担当していた。同時期の『考古学雑誌』に上田三平は亀ヶ岡遺跡の写真を載せており（上田 1934）、是川遺跡などと合わせ、亀ヶ岡の現地を訪れたものと考えられる。

舘発第二九〇號
　史蹟指定申請
一．史蹟　亀ヶ岡石器時代遺跡
右者本村大字亀ヶ岡地内ニ先住民族使用ニ係ル土器石器等多数埋没有之候處近来地方民其手續ヲ為スコトナク濫リニ之ヲ發掘スル傾向生ジ候條保護ヲ要スルモノト被存候ニ付　史蹟名勝天然紀念物保存法ニ依リ史蹟トシテ御指定相成度関係書類相添へ此段及申請候也
昭和九年八月三十一日
　　青森縣西津輕郡舘岡村長　三橋　友吉㊞
文部大臣　松田　源治　殿

青兵第八〇一號
　昭和九年十月十九日
青森縣知事　小林　光政㊞
文部大臣　松田　源治　殿
史蹟指定申請ニ付副申管下西津輕郡舘岡村長ヨリ亀ヶ岡石器時代遺跡ヲ史蹟ニ指定方申請相成候處同所ハ夙に土器石器ノ包含地トシテ世ニ知ラレ好古學者ノ來往頻繁ニシテ濫リニ發掘離散スル傾向有之甚ダ遺憾ト被存候條特別ノ御詮議ヲ以ツテ至急指定相成様致度此段及副申候也

史料１　史跡指定申請書・県進達

文部省告示第一〇一〇號
　史蹟名勝天然紀念物保存法第一條ニ依リ左ノ通指定
昭和十九年六月二十六日
文部大臣　子爵　岡部長景
第一類
　史蹟
名稱　龜ヶ岡石器時代遺蹟
　地名　　地番
青森縣西津輕郡　七五番、七六番、八三番ノ三、八三番ノ四
舘岡村大字舘岡　内實測一段五畝歩、八三番ノ五、八三番ノ六、
字澤根　八三番ノ九内實測一段五畝歩
同大字龜ヶ岡字　自二四番至二六番、二七番ノ一、二七番ノ二
近江野沢　二八番、二九番ノ一、二九番ノ二、自三〇番
　ノ一至三〇番ノ三、五三番、脱落地
同　字龜山　自三二番至四六番、四七番ノ一、四七番ノ二、
　四八番ノ一、四八番ノ二、四九番、五〇番、
　五〇番ノ一、五六番、脱落地
〈説明〉青森縣西津輕郡館岡村大字館岡、龜ヶ岡
指定地積
　國有　九筆内二筆ハ各一部
　民有　三十五筆
説明
　字甕子山及ビ其東南ナル低地ニ在リ、水田下三尺乃至四尺ノ
　部分ニ砂質粘土層及泥炭層アリテ其中ニ特色アル縄紋式土
　器及ビ石器等ヲ包含セルヲ以テ著名ナリ
指定ノ事由
　保存要目史蹟ノ部第九ニ依ル
保存ノ要件
　公益上必要已ムヲ得サル場合ノ外其ノ存在状態ニ影響スベ
　キ現状ノ變更ハ勿論遺物ノ採取ハ許可セサルコトヲ要ス

史料２　史跡指定告示

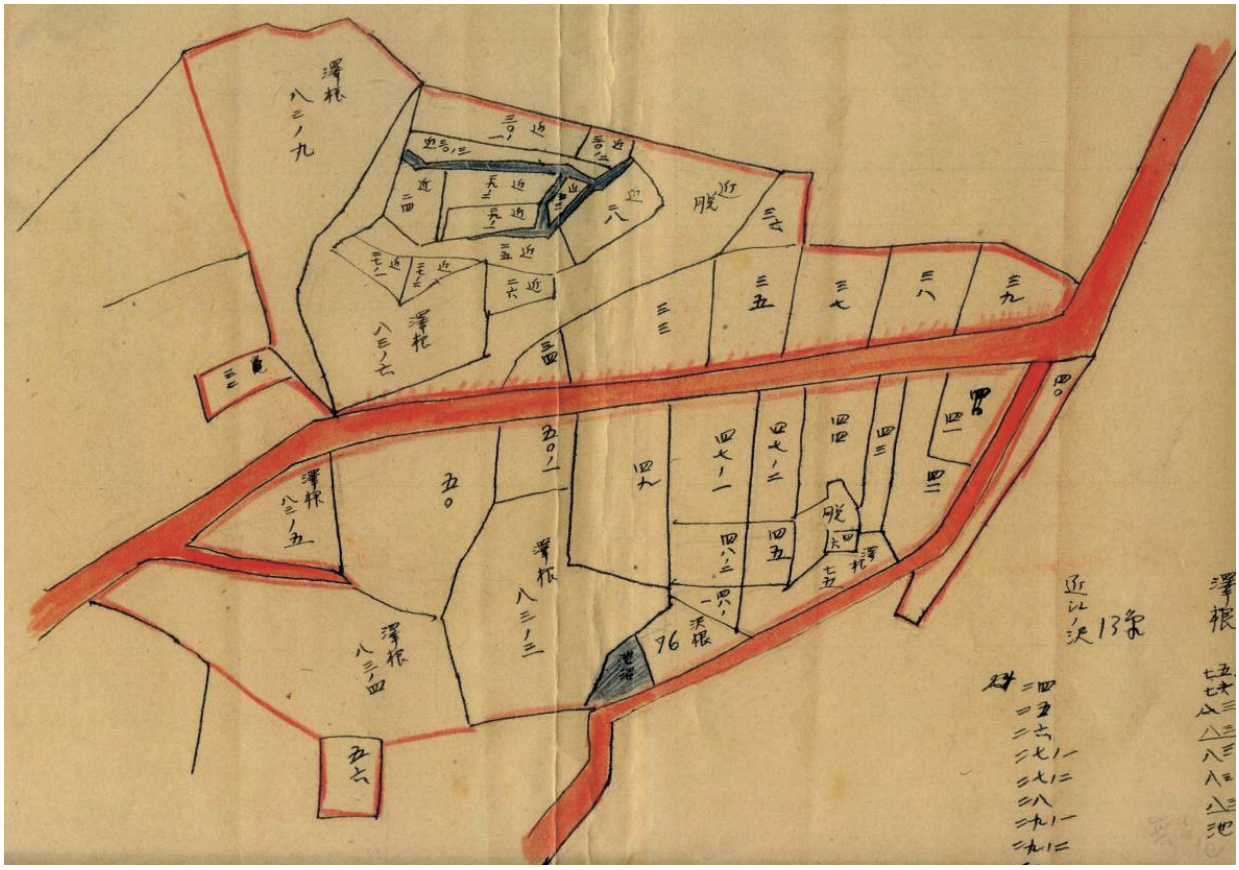


図 3-1　昭和９年（1934）年史跡指定申請時の絵図面（文化庁保管）

また、キウス周堤墓（千歳市）も昭和５（1930）年に北海道庁により仮指定が行われたとされる（大谷 2010）が詳細は不明である。仮指定に関する道県と文部省の間の手続きの問題などもあり、仮指定の官報の告示が確認できないことから、これらの縄文遺跡の昭和 10 年ころの扱いについて不明な点は残る。しかし、亀ヶ岡遺跡の「仮指定」については、上田三平が文部省の公務で青森県内の史跡の現地調査を行った結果を受けたものであった可能性が高い。

本遺跡の史跡指定は北に隣接する田小屋野貝塚と合わせて、昭和 19（1944）年６月 26 日に行われた（史料２）。同年 10 月 24 日には舘岡村が史跡管理団体に指定されている。

亀ヶ岡は三百年以来地方の好事家によって乱掘された事は確かで、一時はこの大宝庫も空墟に等しくなったとまで評価されたが、大正末期頃からバスの便が開けて、中央から続々と学者研究家が来訪するようになった。そして調査の結果、まだまだ相当量の遺物埋蔵が処女地と共に残されていることが証明されて、昭和十九年文部省から「日本新石器時代遺跡」として史跡指定を受けた。／この本指定に先立だって昭和九年仮指定が出た。（中略）世界に類の少い古代美術品であるこの重要な文化遺産の四散を防ぎ、又この偉大な遺跡を永遠に保存するに、そして優秀な伝統を将来に残すため考古陳列館の建設を講ずることこそ、吾等の現下に迫りつつある急務ではあるまいか。

昭和三十一年一月

史料３　佐藤公知編 1956『亀ガ岡文化』あとがきより

第2節　戦前期における石器時代遺跡の史跡指定動向

大正８年に公布・施行された史蹟名勝天然紀念物保存法では、文化財保護法の制定により同法が廃止されるまでの間に史蹟 603 件が指定された（文化庁 2001）。石器時代遺跡としては、大正 10 年３月に京都府京丹後市の函石濱遺物包含地が最初の指定を受け、その後昭和 10 年までには計 21 か所に達したとされる（上田 1935）。史跡指定物件の内容・種類を示した保存要目によれば、石器時代遺跡は「九、貝塚、遺物包含地、神籠石其の他人類学及考古学上重要なる遺跡」に該当し、上田三平の整理に従うと石器時代遺跡の指定物件は「住居阯に屬するもの」・「貝塚」・「遺物包含地」の３種類に大別される。

史蹟名勝天然紀念物保存法のもとで最初期に指定された函石濱遺物包含地と指宿橋牟禮川遺物包含地（大正 13 年）を除けば、多くの石器時代遺跡は「住居阯に屬するもの」あるいは「貝塚」となる。「（前略）史蹟として指定するに適する遺跡は、其範圍の明確にして人工形跡の遺存せるものを選ぶ傾向があるから住居阯の如きは其對象として好適のものとなるのである。」（上田前掲）との上田の解説が示すように、大正末～昭和初期にかけては敷石住居等の堅穴建物跡の検出が史跡指定の重要な要件となったようである。その後も同様の指定傾向が続き、長野県茅野市の尖石石器時代遺跡（昭和 17 年指定）が「高原地における石器時代の聚落地」、群馬県水上町の水上石器時代遺跡（昭和 19 年）が「山地に存する石器時代住居阯」であることを理由に指定されるなか、亀ヶ岡石器時代遺跡は、低湿地の粘土層及び泥炭層中から土器や石器が出土することで著名であることが指定告示の説明にあり、戦前の石器時代遺跡の史跡指定の動向においてはやや特異な例と位置づけることができる。

第3節　木造町への合併から亀ヶ岡考古館建設へ

「昭和の大合併」により館岡村は一町四村と合併し、昭和 30（1955）年４月に新木造町（初代町長成田幸男：1919～2012）が発足する。旧町村から引き継いだ債務に加え、道路・水道整備、町直営病院・診療所の体制整備など民生・インフラ整備などの諸課題が山積する中、翌 31 年５月臨時議会で『亀ヶ岡石器時代遺跡保護条例』が制定された。旧町村議会議員が合併特例で新町議会議員に移行したのち、直前の 31 年３月の選挙で議員構成が一新されていた。累年の諸課題に町を挙げて対応する体制が整っ

同じ頃〔注：昭和三十二年四月〕、縄文亀ヶ岡式土器の散逸を防ぐための収蔵庫（考古館）建設について補助を申請する。〔中略〕当時の埋蔵文化財行政の文部省予算はわずか百万円しかない。これを全国に配分しているから、今年やったとしても少額しかやれない。明年度なら全額の配分ができるというので、翌三十三年、再度申請することにし、採択となる。〔中略〕その頃、最近復刻されている佐藤公知氏の「亀ヶ岡文化」初版が〔注：三十一年四月〕発行される。佐藤氏には町の公民館長に就任いただいていたので、私もつたない序文を書かされることになる。

史料４　成田幸男 1986 より

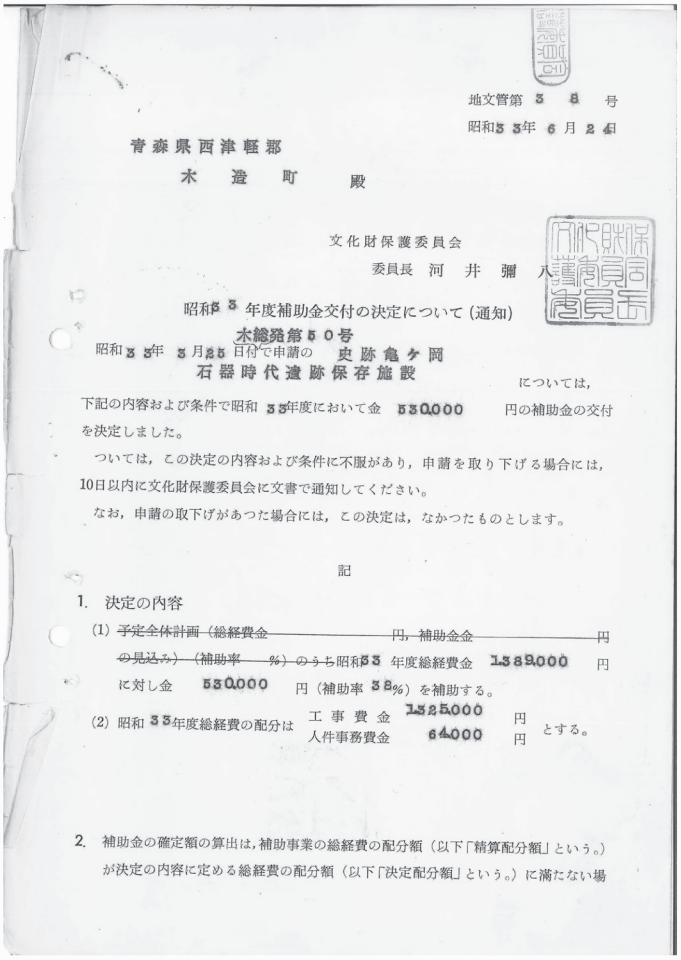
た直後に、埋蔵文化財の保護を主旨に有する条例制定が為されたことになる。本条例は微調整を加えながらも現在のつがる市に引き継がれている。

また、地元に残る亀ヶ岡遺跡の貴重な出土品が美術品バイヤーにより転売され、国内外に四散する事態が問題となっていたこともあり、青森県を介して当時の文化財保護委員会に収蔵・展示施設建設を要望した（成田 1986・史料４）。史料３によれば、昭和 31（1956）年初めころから亀ヶ岡遺跡の出土遺物の集約・保護・公開は課題となっており、『亀ヶ岡石器時代遺跡保護条例』第５条でも町の責任において、出土品を収蔵する施設の整備に努めることが規定されていた。

昭和 32 年度に国庫補助金 47 万円、昭和 33 年度に同 53 万円の交付（史料５）を得て、昭和 34（1959）年３月に県内初の収蔵庫『亀ヶ岡考古館』が鉄筋コンクリート陸屋根構造により、現在の木造亀ケ岡亀山 10 番地、史跡地から徒歩５分程度の場所に完成した（図 3-2・3-3）。建設にあたっては、文化財保護委員会の斎藤忠主任文化財調査官の指導を受けている。その際に遺跡出土の遺物の散逸を防ぐという、同様の趣旨で先行して建設された平出遺跡考古博物館（長野県塩尻市、昭和 29 年開館）や登呂遺跡の静岡考古館（昭和 30 年開館、静岡市立登呂博物館 2012 参照）の建築に関する情報提供を受けている（つがる市教育委員会 2009）。

なお第２章第３節で述べたように、遮光器土偶は昭和 32 年２月 19 日に国の重要文化財に指定されており、昭和 25 年に行われた慶應義塾大学の発掘調査の正報告書も昭和 34 年６月には刊行され、遺跡の調査研究と出土遺物の保護が進められた時期であった。

しかし考古館は、年月とともに湿気過多な状況となり、資料保存に不適な環境となったため、昭和 54（1979）年に閉館することとなった。後継施設として木造亀ヶ岡考古資料室が昭和 55（1980）年に開館した。亀ヶ岡遺跡から直線距離で約１km 南西、遺跡の所在する館岡集落の南西に前年に建設された木造町農業者トレーニングセンター「縄文館」内の一室であり、現在も本遺跡及び史跡田小屋野貝塚のガイダンス施設として機能している。



地文管第 3 8 号
昭和 3 3 年 6 月 2 4 日

青森県西津軽郡
木造町 殿

文化財保護委員会
委員長 河井彌八

昭和 3 3 年度補助金交付の決定について（通知）

木総発第５０号

昭和 3 3 年 3 月 2 5 日付で申請の 史跡亀ヶ岡石器時代遺跡保存施設 については，

下記の内容および条件で昭和 3 3 年度において金 530,000 円の補助金の交付を決定しました。

ついては，この決定の内容および条件に不服があり，申請を取り下げる場合には，10日以内に文化財保護委員会に文書で通知してください。

なお，申請の取下げがあつた場合には，この決定は，なかつたものとします。

記

1. 決定の内容

(1) ~~予定全体計画（総経費金　　円，補助金金　　円の見込み）（補助率　　%）のうち~~昭和 3 3 年度総経費金 1,382,000 円に対し金 530,000 円（補助率 38%）を補助する。

(2) 昭和 3 3 年度総経費の配分は 工事費金 1,325,000 円 人件事務費金 64,000 円 とする。

2. 補助金の確定額の算出は，補助事業の総経費の配分額（以下「精算配分額」という。）が決定の内容に定める総経費の配分額（以下「決定配分額」という。）に満たない場

史料５　補助金交付決定書

図 3-2　亀ヶ岡考古館外観（木造町総務課編 1976）
木造町館岡出張所に併設され、展示室は左側の平屋根部分

図 3-3　亀ヶ岡考古館の遺物展示の様子
（上段の額は県重宝指定書）